

Born Again

新生への道

BEING BORN AGAIN

クリスチャンのための霊的手びき

意志を正しく用いる事によって、あなたの生涯は全く変わるのです。あなたの意志をキリストに捧げる事によって、この世の支配や権威を超越した力とつながることが出来ます。そして、たえず神様に自分を捧げる事によって、あなたは、全く新しい人生、すなわち信仰の生涯を生きていくことができます。

SOS TV

新生への道

BEING BORN AGAIN

新生への道

著者 E. Gould. Harmon

SOSTV JAPAN MISSION

〒298-0214

千葉県夷隅郡大多喜町新丁17-2

☎ 050-1141-2318

Fax 050-1141-2318

PCメール sostvjapan@outlook.com

Website www.sostv.jp

Contents

- 01 人類への神の愛 / 04
- 02 キリストの必要 / 15
 - 03 悔改め / 24
 - 04 告白 / 45
 - 05 献身 / 52
- 06 信仰と受容 / 60
- 07 弟子としてのテスト / 71
- 08 キリストにある成長 / 85
 - 09 人生と活動 / 100
- 10 神についての知識 / 110
 - 11 祈りの特権 / 121
- 12 疑いをどうするか / 139
- 13 主にある喜び / 152

Chapter 1

人類への神の愛

自然と聖書は、神が愛であることを告げています。天の父なる神は、命と知恵と喜びの源です。自然の美しさ、そのすばらしさをよく見てごらんください。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くほど満たしていることを考えてごらんください。輝く太陽、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原、それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要を満たされるのは神です。詩篇の記者は、美しいことばをもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがってかれらに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、

すべての生けるものの願いを飽かせられます」。

(詩篇 145 : 15, 16)

神は初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手で造られたときには、一点の衰えのきざしも、呪いの影もありませんでした。愛のおきてである神の戒めを人が犯したために、死と悩みが生じたのです。けれども罪の結果起こった苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。

聖書には、神は人のために地を呪われたと記されています(創世記 3 : 17)。いばらとあざみ、つまり、いろいろな困難や試みがこの世の生涯を心配や苦勞の多いものにしてはいますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と墮落から救い出すためには、ぜひともなくてはならない訓練として、神がお定めになったものです。

世界は墮落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものの中に希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠に、あざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのです。神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にも記されています。かわいい小鳥は、楽しい歌声で空気を震わせ、美

しい色の花はよい香りをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな、神は優しいお父様のように私たちを守ってくださることや、私たちの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は、神のご性質をあらわしています。神は自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をお示し下さい」と言ったときに、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」（出エジプト33：18, 19）ると言われました。これが神の栄光の表現です。神はモーセの前を通られるとき、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」（出エジプト記34：6, 7）、「怒ることおそく、いつくしみゆたかで」（ヨナ書4：2）「いつくしみを喜ばれる」（ミカ書7：18）ものであると言われました。

神は天にも地にも、数えきれないほどの愛のしるしをまき散らして、私たちの心をご自身に結びつけようとしておられます。自然界のいろいろなもの、また人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は

私たちに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示しているにすぎません。

このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決して赦さない者、厳しい裁判官が強欲な金貸しのように、厳として動かない者のように思わせています。また創造主を、常に人類のあやまちを拾い上げて厳罰を与えている者であるかのように思わせています。イエスが人類の間にお住みになったのは、この暗いかげを取り除いて、神の限りない愛を示すためでした。

神のみ子が天からおいでになったのは、天の父をあらわすためでした。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」（ヨハネ 1：18）。「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」（マタイ 11：27）。弟子の一人が、「わたしたちに父を示してください」とイエスに願ったとき、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたち

に父を示してほしいと、言うのか」（ヨハネ14：8，9）と言われました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明されました。すなわち、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」（ルカ4：18）。これがイエスの使命でした。彼は広くめぐり歩いて良いことをなさり、悪魔に苦しめられている者をいやされました。こうしてあらゆる病気をいやしながら、村々をお通りになったので、村中だれひとり、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きはイエスが神からつかわされたことのあるしりでした。

イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情けとあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのです。イエスが人となられたのも、人間の必要に応じることができるためでした。どんなに貧しい者も、どんなにみじめな人も、恐れずにイエスに近づくことができました。また、幼い子供でさえ彼に引きつ

けられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かな
み顔に見入るのでした。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語られましたが、そ
ういうときにはいつも愛を持ってお語りになりました。
また人と交際するにあたっては、いつも上手に、深い思
いやりと注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの
理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心を何の
必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさい
ませんでした。常に愛をもって真実を語られました。ま
た偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした
鋭い譴責の言葉を語られたときにも、そのみ声は涙にふ
るえていました。道であり真理であり命である自分を拒
んだ、愛する町エルサレムのことを考えて、主イエスは
泣かれました。人々はイエスを拒んだのですが、イエス
は優しく彼らをあわれまれたのです。彼は一生の間、自
己を全く捨てて、人のために尽くされました。イエスの
目にはどの魂もみな尊く映ったのです。彼は神の子の権
威を備えておられましたが、へりくだって、神の家族の
一人ひとりをやさしく思いやり、どの人を見ても、この
罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であると思われ
たのです。

キリストの生涯はこうした性質のものでしたが、これこそ神のご性質です。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父の心から出たものです。優しく思いやり深い救い主イエスは、「肉において現われ」（1テモテ3：16）た神でした。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死なれたのは、私たちがあがなうためでした。彼は私たちが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」となられました。神は、恵みと真理に満ちたひとり子を、栄光に輝くみ国から、罪にそこなわれ、死と呪いに暗く閉ざされたこの世に下されたのです。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声を後にして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、最後には死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」（イザヤ53：5）。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんください。一点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共におられた方が、罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験されたの

です。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27：46）という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのです。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでした。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に、人に対する愛の気持ちを起こさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなくて、「神は、そのひとり子を賜ったほどに、この世を愛」（ヨハネ 3：1）されたのです。神は、その大きななだめの供え物のゆえに、私たちを愛されたのではなく、私たちを愛するゆえに、なだめの供え物をお与えになったのです。キリストは、罪に落ちた世界に神の限りない愛を注がれる仲介者でした。

「神はキリストにおいて世を御自分に和解させ」（II コリント 5：19）とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通して、限りない愛を持たれる神は、私たちのあがないの代価をお払いになったのです。

イエスは、「父は、わたしが自分の命を捨てるから、

私を愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」（ヨハネ10：17）と言われました。これはつまり、こういう意味です。

「私の父は、あなたがたをこの上なく愛しておられますから、私があるがたの救いのために命を捨てたことによって、以前にもまして私を愛してください。あなたがたの負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代わり、保証人となったため、私は父にいつそう愛されるようになったのです。なぜなら、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信じる者をも義とすることがおできになるからです」

神の子のほかには、誰も私たちのあがないを全うすることはできません。というのは、神のふところにいた者でなければ神をあらわすことができないからです。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのです。墮落した人類のためにキリストが払われた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神は、そのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった」（ヨハネ3：16）。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、彼らの犠牲と

なって死ぬためにお与えになったばかりでなく、神は、キリストそのものを墮落した人類にお与えになったのです。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わわれました。神と一つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」（ヘブル2:11）とされません。彼は私たちの犠牲、また助け主、私たちの兄弟です。神のみ座の前に人間の姿をもって立ち、永遠に自らあがなわれた人類の一人となられた「人の子」です。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清い者となる喜びにあずかるためでした。

私たちのあがないのために払われた価、私たちのために、そのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神のはかり知れない犠牲を考えると、キリストによって、私たちは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。靈感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔な思いでいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを表現するのにふさわしい言葉を見いだすことができなくて、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな

愛を父から賜ったことか」（1ヨハネ3：1）と世界に呼びかけています。人はなんとという尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストのあがないの犠牲を信じることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのです。キリストは、人の性質をおとりになって人類を引き上げてくださいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのです。

このような愛に比べられるものは何もありません。天の王子となるというのです。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い冥想に価する主題です。神を愛さなかった人類への、たぐいもない神の愛です。この愛を考える時、心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして、十字架の光に照らされて、神のご性質を学べば学ぶほど、神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが一つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る、限りない優しい愛の、数知れない証拠を認めることができるようになります。

キリストの必要

人は初め、優れた能力と調和のとれた精神を与えられていました。彼はまた、人として完全で神と調和し、思想も純潔で清い目的を持っていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心に変ってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのですから、もし、神が特別に救ってくださらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでしょう。悪魔は、人を創造された神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人を創造された結果であると言おうとしたのです。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ2：3）キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯した後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとなりました。今日でも、新生を経験しない人の状態は同じで、彼らは神と一致していないため、神と交わることを喜ばないのです。罪人は神の前では楽しむことができません。彼らは清い人々との交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとまらないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限らない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も、天国に住む罪のない人々の心とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのです。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとするでしょう。悪人は天国に入れないというのは、なにも神が独断的に決めになったのではありません。それは、彼らが自分でそうした交わりに不適当な者となってしまったからなのです。神の栄光は、罪人と

っては焼きつくす火です。罪人は、自分たちをあがなうために死なれたキリストのみ顔を避けて、滅ぼされたいと望むようになるのです。

私たちは、自分の力で、一度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私たちの悪い心を変えることもできないのです。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか。ひとりもない」（ヨブ 14：4）、「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」（ローマ 8：7）、とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持っていますが、心を新たにできる能力は全くありません。もちろん、私たちの行動に、外面的な正しさは与えるかもしれませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのです。天からの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪から清められることはできません。この力というのはキリストです。キリストの恵みだけが、人の力のない魂を生きかえらせて、これを神と聖潔へと導くことができるのです。

救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と言われました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、

新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：3）のです。人は、生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは、恐ろしい誤りです。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（1コリント2：14）、「あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」（ヨハネ3：7）とあります。またキリストについては、「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」（ヨハネ1：4）、「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝4：12）と記されています。

人はただ、神の愛とつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわされた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこの

ことをよく知っていて、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」。「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」と叫んだのですが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」（ローマ7：16、12、14）と言いました。それは、言葉につくせない苦痛と失望があったからです。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでした、彼自身にそこまで到達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」（ローマ7：24）と叫んだのです。このような叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものです。こうした人々への答えは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1：29）というみ言葉よりほかにありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつもの例をあげて、この真理をわかりやすく説明し

ています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れたとき、言いようのない罪の重荷で押さえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、一人寂しく家を追われていく彼が、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天から全く見捨てられてしまったのではないかいうことでした。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し、空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったとき、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出しました。それは、今自分が眠っている原野から、大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を天使が昇ったり降りたりしていました。そして輝く栄光のかなたから、慰めと希望に満ちた声が聞こえてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのです。彼は罪人である自分がもう一度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢にあらわれた不思議なはしごは、神と人類の間のただ一人の仲保者イエスをあらわしたものです。

キリストがナタナエルと語られたとき、「よくよくあ

あなたがたに言うておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ1：51）と言われたのは、これと同じことを指していたのです。人間は神に背いて自ら神から遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。この誰も渡ることのできない深い淵を再びつないで、地と天とを結び付けてくださったのはキリストです。キリストはご自身の功績によって罪の深い淵に橋を架け、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにしてくださいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を、限りない力の源につないでくださるのです。

人間がどれほど進歩を夢み、人類向上のためにどれだけ努力したとしても、墮落した人類にとってただ一つの希望と助けの源に頼らなければ、何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ1：17）神より与えられます。神を離れては、ほんとうに高潔な品性を持つことはできません。そして、神へのただ一つの道はキリストです。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ14：6）と語られました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておられます。神がひとり子をお与えになったということは、全天を注ぎだして、一つの賜物としてお与えになったということなのです。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願、これらいっさいのものを通して働いておられる父なる神と、天の住民たちの絶え間ない関心などが、すべて人の救いのために力を添えているのです。

わたしたちのために払われた、驚くばかりの犠牲を静かに瞑想してみましょう。失われた者を呼び返し、父なる神の家に連れ戻すために、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝しましょう。これにまさる動機や力ある方法は、ほかではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天使との交わり、神のみ子との愛の交わり、また永遠にわたって私たちの能力が伸ばされ、高められていくことなどは、私たちの創造主、救い主に心から愛の奉仕をさせずにはおかない動機であり、励ましではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の墮落、そして最後の滅亡などがみ言葉に記されているのは、私たちに悪魔の働きを警告するためです。

私たちは、神の憐みを無視してもいいのでしょうか。いったい神は、これ以上何かなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私たちを愛された、神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして、与えられた方法を最もよく用いて、神のみかたちに変えられて、もう一度天使と交わることで、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものです。

Chapter 3

悔改め

人は、どのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私たちは、ただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それでは、どうすればキリストのもとに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々が同じ質問をしています。ペテロは、「悔改めなさい」（使徒行伝2：38）と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」（使徒行伝3：19）とも言っています。

悔い改めとは、罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは、罪を捨てるも

のではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活にほんとうの変化は起こらないのです。

悔い改めのほんとうの意味をわかっていない人が多くいます。罪を犯したことを嘆き、外面的には悔い改める人もいますが、それはその悪事のために苦しみに会わなければならないことを恐れるからです。しかし、これは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりも、むしろ罪からくる苦しみを悲しむのです。エソウが家督の権利を永久に失ってしまったと気づいたときの悲しみがそうでした（創世記25～27章）。またバラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのです。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ、罪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして罪を犯しました」（マタイ27：4）と叫びました。

ユダは、恐ろしいさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねて、こういう告白をせずにはおられなかったのですが、それは自分の身にふりかかってくる結

果を恐れたため、傷のない神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを、深く心の底から悔いたのではありませんでした。パロも、神の刑罰を受けて苦しんだとき、それ以上の刑罰をのがれるため自分の罪を認めましたが、災いが止むと、また、前のように神にそむいたのです（出エジプト記12章）。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども、人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神のおきてがいかに深くまた聖いものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのです。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」（ヨハネ1：9）とあるその光に、心の奥底を照らされ、また暗闇にかくされていた事柄を照らし出されて、心も魂も、自分は罪ある者だという思いでいっぱいになります。そして、正しく、また人の心を探られる神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして、神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も聖められて神との交わりに立ち帰りたくと切望するようになるのです。

ダビデが罪を犯した後にささげた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのです。自分の罪を弁護しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰から逃れようという気持ちから祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさと魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのです。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく、心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう一度神とやわらぎ、神との交わりに入りたいと願ったのです。彼の心から次のような言葉があふれ出しました。

「そのとががゆるされ、

その罪がおおい消される者はさいわいである。

主によって不義を負わされず

その霊に偽りのない人はさいわいである」

(詩篇 32 : 1、2)

「神よ、あなたのいつくしみによって、

わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによって、

わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・

・ ・ わたしは自分のとがを知っています。

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。

ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい 正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。
(詩篇 51：3～16)

このような悔い改めは、とうてい自分の力でできるものではありません。これは天にお上りになって、人間に聖霊の賜物を与えてくださるキリストによるほかないのです。

ところがここで思い違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのです。つまり彼らは、まず悔い改めなければキリス

トに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔い改めただけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然です。それでは、罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいのでしょうか。

聖書は、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ 11：28）というキリストの招待は、罪を悔い改めなければ受けられないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのです。ペテロはこの点をはっきり述べて、「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」（使徒行伝 5：31）とイスラエル人に言っています。私たちは、キリストなくしては赦しが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのです。

キリストはすべての正しい動機の根源であって、彼

だけが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができなくなります。ですから、真理や純潔を慕い求めること、自分の罪深さを認めることなどは、キリストの霊が私たちの心に働いておられる証拠です。

イエスは、「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」（ヨハネ 12：32）と言われました。キリストは世の罪のために死なれた救い主として、罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊をながめるときにはじめて、説明することのできない救いの計画の神秘が私たちの心にも理解され、神の深い恵みが私たちを悔い改めへと導くのです。キリストは罪人のために死なれ、はかり知れない大きな愛をあらわしてくださいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのです。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥ずかしいと思い、悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力するときはいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているので

す。自分たちが意識していなくても、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのです。やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪が彼を刺し通したことを知るとき、おきての精神が良心にはっきり焼きつけられ、悪に満ちた生活や、心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義が何であるかを幾らかでも理解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものだろう。罪のとりこになった者を救うためには、このような大きな犠牲が払われなければならなかったのか。私たちが滅びないで、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要だったのか」と叫ばずにはおられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らえば自然にイエスに引き寄せられるのです。そして救いの計画を知ると、自分の罪が愛する神のみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのです。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渴望を起こさせるのです。この世のもので

はどうしても彼らの渴望を満たすことはできません。聖霊は、心に真の平安を与えることができる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めると訴えています。私たちの救い主は絶えず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れ、キリストによって与えられる限りない祝福を求めよう、私たちの心に働きかけておられます。この世の渴ききった泉のほとりで飲もうとしても、飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」（黙示録 22：17）と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが、魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうかその時は、神が悔い改めを与えてくださるよう、そして限りない愛にあふれ、全く純潔そのものの姿のキリストを、お示しくくださるよう祈っていただきたいのです。救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行されました。また、慈しみと無我の愛が救い主の命でした。ですから私たちが救い主をながめ、救

い主の光に照らされるとき、はじめて自分の心の罪深さが見えてくるのです。

私たちがニコデモのように、自分の生活は正しくて、道徳的にも間違ったことはしていないとうぬぼれて、ふつうの罪人のように神の前にへりくだる必要はないと考えているかもしれませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどれほど汚れているかがわかるのです。また、何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのです。そして、私たちの義は汚れた衣のようであって、キリストの血だけが罪の汚れを清め、彼の品性にかたどって、私たちの心が新しくされることを知るのである。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔の一瞬のきらめきでも、人の心に差し込むなら、心の汚れの一つひとつが、痛いほどにはっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥がすべてさらけ出されます。それは汚れた欲望、不誠実、汚れた会話などをはっきり見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る聖霊に打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格を

ながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされたとき、その天使を包む栄光を見て、自分の弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまいました。その驚くべき光景に打たれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」（ダニエル10：8）と言いました。このように、神と出会った魂は、利己心を憎み、自己愛を忌みきらい、キリストの品性に調和した心の純潔を求めるようになります。

パウロは「律法の義については落ち度のない者である」（ピリピ3：6）と言いましたが、ひとたび、律法の霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのです。人が律法を外的生活にあてはめ、律法を字義的に解釈するなら、彼は罪を犯していなかった、と言えるでしょう。しかし、その聖い条文の深い精神を見つめ、神がご覧になるように自分を見つめたとき、心はへりくだり、神の前にひれ伏し、自らの罪を告白したのです。彼は、「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」（ローマ7：9）と語りました。ひとたび、律法の霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、はつき

りと見せられ、自尊心は消え去ったのです。

神は、どの罪もみな同じであるとは見なされません。人間と同じように、やはり大小、軽重の区別をされません。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には、決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものですが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。たとえば大酒飲みは軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われてますが、その反面、高慢、自己愛、どん欲などは責められず、見過ごしにされがちです。しかし、神はこうした罪を特に嫌われるのです。というのは、これは神の憐れみ深い品性に反し、墮落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからです。何か大きい罪を犯した者は自分を恥ずかしく思い、罪深さを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉ざしてしまい、キリストが来られて与えようとされる無限の祝福を受けることができないのです。「神様、罪人のわたしをおゆるしてください」（ルカ 18：13）と祈ったあわれな取税人は、自分をひどい悪人であると認めました。また他の人々も同じように、彼をそう見なしていました。しかし彼は、

自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいただいたまま神のみ前に出て、あわれみを請い求めたのでした。彼の心は聖霊の恵みある働きにより、罪の力から解放されるために開かれていました。一方高ぶって自分を義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉ざしていたことがわかります。彼は、神から遠く離れていたので、神の完全な神聖さと比べても、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自分が罪深いことに気づいたなら、自分でよくしようと思って待つてはなりません。自分はキリストのもとに行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも善を行うことができる」(エレミヤ書 13 : 23)とあります。私たちを助けてくださるのは神のみです。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまで、などと待つてはなりません。私たちは自分の力では何もできないのですから、

ありのままでキリストのもとに行くほかはないのです。

しかし、神は愛と恵みに富んでおられるからといって、その恵みを拒む者まで救ってくださると思ひ、自らを欺いてはいなりません。罪がいかにか恐るべきものであるかは、十字架の光に照らされてはじめてわかるのです。神は憐れみ深いお方なので罪人をお捨てにはならないと説く人は、カルバリーの十字架を見るべきです。というのは人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖い者との交わりに立ち帰り、再び靈的生活にあずかる者となるには、キリストご自身が不従順の罪を負い、罪人の代わりにお苦しみになるよりほかに方法がなかったのです。神のみ子の愛と苦難と死はみな、罪がいかにか恐ろしいものであるかを明らかにし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力から逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンと呼ばれる人のことを口実にして、「私もあの人たちと同じくらい善良だと思ふ。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われぬ、私と同じように快樂を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他

人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもよい言いわけにしているのです。しかし、他人の罪や欠点は言いわけにはなりません。なぜなら、主は私たちに、間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私たちの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子です。クリスチャンの間違いをあれこれいう人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンとは、こうでなければならないと、それほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きいのではないのでしょうか。なぜなら、彼らは正しいと知りながら実行しようとしなからずです。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、キリストによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今、人生の短いことや、はかないことを言おうというわけではありませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、聖霊のささやきに従うことを延ばし、罪の生活を続けていくという恐ろしい危険です。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけること

は、永遠に失われる危険を犯しているのです。私たちが打ち勝たないものは、やがて私たちを打ち破り、ついには私たちを滅びへと引きずりこむのです。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことだから、神が宣言されたような恐ろしい結果にはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかし、この小さなことが神の変わることをない聖いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、数限りない災いをもたらしたのです。それ以来、いつの時代にも嘆き、悲しみの声が上がリ、すべての被造物が人間の不従順の結果、うめき苦しんできたのです。天そのものでさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪をあがなうため払われなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪を小さいことのように軽く考えてはならないのです。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにして拒んだりするどんな行為でも、その一つひとつが自分にまた返ってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます聖霊の優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従

うことができないようになってしまいます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、憐みの招待を軽んじながら、なお聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の呵責をしずめようとしている人々がたくさんいます。彼らは、聖霊の恵みを侮り、悪魔に加担していても、いよいよ動くに動けない窮地に陥ったときには、方向を変えることができると思っています。しかしそれはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育は、すっかり人の性格を形づくってしまっているので、そのときになって、イエスのご品性を受けたいと望むことはほとんどないのです。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいるなら、ついには福音のすべての力を無にしていまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分の播いた種を収穫しているにすぎません。昔の賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながる」(箴言5：22)と言いましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいということ、これほど適切に忠告しているも

のではありません。

キリストは、いつでも私たちを罪から解放しようとしておられます。けれども、私たちがどこまでも罪を犯し続け、その結果、意志は全く悪に傾き、罪から解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしなないならば、キリストは何をなさることができるでしょうか。私たちは彼の愛をどうしても受け入れようとしなため、自らを滅びに陥れるのです。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」（Ⅱコリント6：2）

「きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、・・・心を、をかたくなにはしてはいけない」（ヘブル3：7, 8）

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」（サムエル記上16：7）。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまな不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになります。汚れたそのままの心で、神のみもとに行きましょう。詩篇の記者がうたったように、すべてをごらんになる神に心を大きく開いて、「神よ、どうか、わたしを探して、わが心を知り、私を試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わ

たしをとこしえの道に導いてください」(詩篇 139 : 23, 24)と願いましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私たちは「神よ、わたしのために清い心をつくり わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇 51 : 10)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、辛抱強く、また熱心でなければなりません。これは、神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題です。ただそうあればよいと望んでいるだけで、それ以上何もしないならば滅びるしかありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるなら、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、聖めという大原則を教えていること、また、この聖さがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル 12 : 14)ということがわかってきます。またそれは、罪と赦しの道を明らかに示します。私たちはみ言葉を、神が魂に語られる声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うた

めにおいでになりました。私たちは、何も自分で神とやわらぐではありません。——ああ、なんと驚くべき愛でしょうか。——神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」（Ⅱコリント5：19）られたのです。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておられます。世の中のどんな親であっても、神が救おうとしておられる人々を忍耐されるほどに、子供たちの失敗やあやまちを忍耐することはとうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく、迷っている者を呼び返そうとした方はありません。神の約束や警告はみな、言葉で表すことのできない愛の息吹きにほかならないのです。

悪魔が来て、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めると共に、敵には「キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来て下さった」（Ⅰテモテ1：15）と告げなければなりません。そして、そのはかり知れない愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、借財している二人について質問されました。一人

の負債は少額でしたが、もう一人は多額の負債を持っていました。しかし主人は二人とも許しました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」（ルカ7：43）と答えました。私たちは罪深い者でしたが、私たちがゆるされるためにキリストが死なれました。彼の犠牲の功績は、私たちの代わりとして神のみ前にささげられるのに十分でした。最も多くゆるされた者が、キリストを最も多く愛するようになり、そのみ座の最も近くに立って、その大きな愛と犠牲をほめたたえるのです。私たちが救うために下げられた鎖の長さを知り、キリストが身代わりになって払われた限りない犠牲をいくらかでも悟るとき、心は言いつくせない感謝にあふれ、悔いせずおれずにはいられないのです。

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表してこれを離れる者は、あわれみを受ける」（箴言 28:13）

神の憐れみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的です。神は、私たちの罪が赦されるために、何か面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。遠くまで巡礼の旅に出たり、痛々しい苦行をして、天の神に良く思われようとしたり、罪の償いをしようとしなくてもよいのです。ただ罪を言いあらわして、罪から離れる者はあわれみを受けるのです。

使徒ヤコブは、「互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互いのために祈りなさい」（ヤコブ 5:16）と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、あやまちは互いに

言いあらわすのです。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったと認めてあやまるのです。そして、それをこころよく赦すのはその人の義務です。そうしたあとで神の赦しを求めるのです。というのは、あなたが傷つけた兄弟は神のもので、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に対して罪を犯したことになるからです。そしてこのことは、真の仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったがすべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」（ヘブル4：15）たのですから、どんな罪の汚点をも清めてくださいます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果たしていないのです。二度と悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった、砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪の赦しを求めたとは言えません。また、罪の赦しを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私たちが過去の罪の赦しを味わっていないただ一つの理由は、心を低くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはつき

り教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的なものであっても、真心から、そして十分に言いあらわされなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りない憐れみを持たれる神へ届きます。詩人ダビデは、「主は心の碎けた者に近く、たましいの悔いせずおれた者を救われる」(詩篇 34:19)とっています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言いあらわすのです。神にだけ告白すべきものもあるでしょう。また、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもあるでしょう。あるいは公のものであるならば公に告白しなければならないこともあるでしょう。いずれにせよ、告白はすべて、はっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めなければなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神から迷い出て、罪の結果に苦しまなければならませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治められることを見失い、さらに、神はご自身の働きを必ず守られる

ことを信じなくなったからです。彼らは宇宙の偉大な統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのです。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりません。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪をくわえました」（サムエル記上 12：19）。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されなければならなかったのです。彼らの忘恩の精神が彼らの魂を押さえつけ、神から切り離していたのでした。

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわされ、神の嫌われるすべてのものを捨てなければなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのです。私たちのすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って清くなり、私の目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」（イザヤ 1：16、17）。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」（エゼキエル 33：15）と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなに

か熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント7：11)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分の犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的にしか見ることができないのです。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったと言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起こらなかつたら、自分はああもしなかつたし、こうもしなかつた、何もしかられることはなかつたのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初、どのように自分たちの罪の言いわけをして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただされたとき、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて、「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木からとってくれたので、

わたしは食べました」(創世記 3：12、13)と言いました。どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問が、この罪の言いわけのうちに含まれていて、それは、彼らの墮落の責任は神にあると言っているのです。自己を義とする精神は、偽りの父である悪魔から来たもので、アダムの息子、娘はみなこの精神をあらわしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、何の虚飾も偽善もなく、罪を認めるのです。哀れな取税人のように、目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしてください」(ルカ 18, 13)と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とされます。というのはイエスは悔い改めた魂のために、自らの血をもって、執り成しをなさったからです。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられています。そこには罪の言いわけをしたり、自分を正しいとするようなことが少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は、次のように言っています。「多

くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすにいたりました」（使徒行伝 26：10、11）。また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』……わたしは、その罪人のかしらなのである」（1テモテ 1：15）と言ってはばからなかったのです。

真に悔い改め、謙遜になった心は、神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から絶えず感謝するようになります。そして、本当に悔改めたものは、子供が優しい父親に告白するように、神の前に自分の罪をすべてもってきます。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださる」（1ヨハネ 1：9）と記されています。

献身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ 29:13、14)と約束されました。

私たちは全心をささげて神に従わなければなりません。そうしなければ、私たちを神のみかたちに回復する変化は起こらないのです。私たちは、生まれながら神から遠ざかっている者です。聖霊は私たちの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」(エペソ 2:1)。「その頭はことごとく痛み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ 1:5、6)と。私たちは全く「悪魔に捕えられて」(II テモテ 2:26)、彼の思いのままに、しっかりととりこにされています。神は私たちがいやし、解放しようと望んでおられます。

けれどもこれには全面的な改革、つまり私たちの性質を全く新しくしなければなりませんから、私たちは自己のすべてを神にささげなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いです。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らなければなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはないのです。神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると、悪魔は私たちに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものです。「さあわれわれは互いに論じよう」(イザヤ1:18)と、創造主は私たち造られた者を招いておられます。神は決して造られたものの意志を強制したりなさいません。真心から、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れられません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を単なるロボットにしてしまいます。創造主はこのようなことを望まれません。神は創造の極致である人間が、最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私たちの前に最高の祝福をおいて、恵みによって私たちをそこまで導こうとなさいます。また私たちが彼のみ心を行なうことができるように、自分自身を神にささげるようにと勧めておられます。罪の絆から切り離されて、神の子と

しての栄えある自由を味わうか否かは、私たちの選択にかかっています。

神に自己をささげるには、私たちが神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ 14:33)と救い主は言われたのです。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金銭を愛し富を追及することは、彼らと悪魔をつなぐ黄金の鎖となるのです。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、何の責任も負わず、利己的で安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らなければなりません。私たちは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子ではないのです。

しかし、神に仕えていると公言しながら、自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人がいます。このような人の心は、キリストの愛に強く動かされたものではありません。天国に入るために神が要求されたものであるからという理由で、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。その

ような宗教は何の役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂は彼の愛と、彼との交わりからくる大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、彼を熟視して自分を忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらいささげれば神のご要求を満たすことができるか、などと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれてすべてをささげ、彼らが求めている価値高いものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信じると告白することは単なる話だけのことであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役にすぎないのです。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりにも大きな犠牲と感じられるでしょうか。「キリストは私に何を与えてくださったか」ということを考えていただきたいのです。神のみ子は、すべてのものを——いのちと愛と苦しみとを——私たちをあがなうためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私たちが、自分の心を神にささげないでいられるでしょうか。私たちは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みを受けて生きてきました。私たちは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたのかを

自覚していないのです。私たちは、自分の罪が刺し通したキリストをながめながら、彼の愛と犠牲を侮蔑することができるとでしょうか。栄光の主の無限のへりくだりをよく知りながら、罪との戦いや、自己卑下を通してでなければ命に入ることができないと言って、つぶやいてもよいのでしょうか。

「悔い改めて心を低くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことだろう」と尋ねる高慢な人が多くいます。そういう人はキリストを見ていただきたいのです。彼は罪を犯されなかったばかりでなく、天の王子でしたが、人類の身代わりとなって罪人となりました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ53:12)のです。

私たちがすべてを捧げるといっても、いったい何を捧げるのでしょうか。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、彼の無比の愛によって救われるためにささげる、罪に汚れた心だけです。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしくなります。

神は、私たちが持っている益になるものは、何ひとつ捨てるようにとはお求めになりません。何をなさるにも、いつも

その子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているものよりも、はるかに良いものを神は備えておられるということ、キリストを選んでいないすべての人が悟るように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼすのです。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福を計画しておいでになる神が禁じられる道に、本当の喜びはありません。罪の道は悲惨と滅亡の道です。

神は、自分の子供たちが苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りです。全天が人間の幸福に関心を持っています。私たちの天の父は、だれに対しても喜びの道を閉じられることはありません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉ざしてしまうようなことにふけてはならないと、私たちに戒めておられます。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によってあがなわれたばかりでなく、世の救い主は彼のくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の願いをかなえてくださるのです。

いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみ心なのです。また、神は私たちに一定の義務を果たすように要求されますが、それは不従順な者たちには

決して到達することのできない祝福の高みに私たちを導くためです。心の真の喜びは、栄光の望みであるキリストを心の中に形作ることです。

「私はどうすれば神に自らをささげることができるでしょうか」と、尋ねる人が多くいます。そして、自分を神にささげたいと望んでいながら、道徳的な力が弱く、疑いの奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂で作った縄のようにもろく、自分で自分の思想、衝動、愛情を制することができません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは、本当の意志の力とはなんであるかを知ることです。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力です。すべてはただ意志の正しい行動にかかっているのです。神は人間に選択の力をお与えになりました。

つまり、人がそれをを用いるようにお与えになったのです。私たちは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神にささげることにはできません。けれども、神に仕えようと選ぶことはできます。意志は、神にささげることができます。そうすれば、神は私たちのうちにお働きになって、神の喜ばれるよう

に望み、また行うようにしていただきます。こうして性質は全くキリストの霊に支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまた彼と一致するようになります。

善や清めを望むのは正しいことですが、そこでとどまるなら何の役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、減んでいく人が多いのです。それは彼らが、神に自分の意志をささげるところまで到達しないからです。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないのです。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変わってしまいます。意志をキリストに完全に服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのです。そして、天からの力を受けてしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのです。

信仰と受容

聖霊によって私たちの良心が目覚めると、罪がいかに忌まわしく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災いがあるようなものであるかがいくらか分かってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神から引き離してしまい、自分が悪の力の奴隷になっていることに気づくのです。逃れようと、もがけばもがくほど、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、何とかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのです。神と調和し、神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことです。それは、金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れること

もできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのです。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで・・・買い求」(イザヤ：55：1)めることのできる賜物として与えられるのですから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのです。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」(イザヤ1：18)。「わたしは新しい心をあなたがたに与え新しい霊をあなたがたの内に授ける」(エゼキエル36：26)と言われます。

あなたは自分の罪を告白して、心の中からこれを捨て去り、神に自らをささげようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き、罪を洗い去って新しい心を与えてくださいとお願いしなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうしてくださると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えられた教訓であって、神が私たちにお約束になった賜物は、それを得たと信じるときに、私たちのものとなるのです。人々が彼の力を信じた時、イエスは病気をいやされました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、彼に信頼

をおくように教えられました。イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと言われました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』」と言ひ、中風の者に向かって、『起きよ、床取りあげて家に帰れ』と言われた」（マタイ 9：6）同じように伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである（ヨハネ 20：31）」と書いています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私たちは罪のゆるしを得るためには、どのようにして彼を信じればよいかについてある程度知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は38年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたことを信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くこ

とができたのです。彼は、キリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのです。

罪人である私たちも同じです。過去の罪をあがなうことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してしてくださるとお約束なさいました。あなたはまずこのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば、必ず神はそのみ約束を果たして下さるのです。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実としてくださるのです。この病人が自分がいやされたと信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったのと同じようにあなたはいやされるのです。信じたようになるのです。

いやされたと感じるまで待つてはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束なさったからです」と言ひましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでになえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる

であろう」(マルコ 1 1:2 4)と言われましたが、このみ約束には条件が一つあります。それは神のみ旨に従って祈るということです。けれども、私たちの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみ心です。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのです。イエスのもとにきて清められ、恥じることなくおきての前に立つことができるのは私たちの特権です。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。…肉によらず霊によって歩く」(ローマ 8: 1, 4)とあります。

ですから、私たちは自分のものではなく、代価を払って買われたものです。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなくきずもしみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(1ペテロ 1: 1 8, 1 9)とあります。神を信じるこの簡単な行為によって、聖霊は私たちの心に新しいいのちを与えます。私たちは神の家族の子供として生まれたのです。ですから神はみ子を愛されると同様に私たちを愛してくださるのです。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストにささげました」と言って、聖霊を与えられ、彼の恵みによって支えられるよう祈りましょう。自己を神にささげ、神を信じる時神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ2：6)と言いました。

世の中には、自分たちは試験されているのであって、心を改めた証拠がなければ、神の祝福を受けることができないと考えている人々がいます。しかし、今すぐにも祝福を求めて受けることができるのです。神の恵み、キリストの霊を受けて、自らの弱さを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのです。イエスは、私たちが罪に汚れどうすることもできないままで、みもとに行くのを喜びになります。私たちは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま、悔いの涙をもって主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私たちをいだき、傷をつつみ、すべての汚れから清めるこ

とをご自分のほまれとなさいます。

多くの人が、あやまったのはこの点であって、イエスが個人的に、一人ひとりにゆるしを与えられることを信じないのです。彼らは神のみ言葉をそのとおりに信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのです。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いを捨てなければなりません。このみ約束は悔い改める罪人一人ひとりのためです。キリストが備えておられた能力と恵みは、み使いによって、信じる魂一人ひとりに与えられています。どんなに罪深いからといっても彼らのために死なれたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染まった汚れた衣を脱がせ、義の白い衣を着せようと待っておいでになります。死ぬことなく、生きなさいと招いておいでになるのです。

神は、人間がお互いを取り扱うように私たちを扱われるようなことはありません。彼は、愛とあわれみといつくしみ豊かな神です。「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、

主はゆたかにゆるしを与えられる」(イザヤ55:7)。

「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ44:22)と言っておられます。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル18:32)。悪魔は、この尊い神からの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸してはなりません。「イエスは私が生きるために死んでくださったのです」と言いましょう。彼は私を愛し、私が滅びるのを喜ばれません。私にはまた愛にあふれる天の父があります。私は、天の父の愛をないがしろにし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたに向かっても、罪をおかしました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と言わなければなりません。このたとえば、さまよい出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたの

に、父は彼をみとめ、哀れに思つて走り寄り、その首をだいてせつぷんした」(ルカ15：18～20)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかない物語ですが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは、限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ31：3)と言われました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じているのです。そして、神へ帰りたいたいと言う気持ちを彼の心に起こさせるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であつて、さまよい出た者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしておられるのです。

聖書には、こうした約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。哀れな罪人が帰りたいたいと思ひ、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのを拒むなどと考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父がそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものではありません。神は罪を憎まれますが罪人をお

愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでした。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにしてくださったのです。神が私たちに対する愛をあらわすためにお用いになった次の言葉ほど、強く優しい言葉はありません。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子をあわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない」(イザヤ49：15)

疑い、おののく人々よ、目を上げようではありませんか。イエスはなお生きて、私たちのために執り成しをしておられます。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、彼の死が無駄にならないよう祈りましょう。聖霊は今日、あなたを招いておられます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのです。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言いあらわすことのできない愛とあわれみの表現であるということを感じましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人を引きつけています。「その血による

あがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ 1 : 7)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じてください。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおられます。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私たちに近づかれるのです。

弟子としてのテスト

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである」(IIコリント5：17)。

人は、いつどこで悔い改めたのか、あるいはどんな段階を経て改心したかをはっきり語ることはできないかもしれませんが、それだからといってその人が悔い改めていないとは言えません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それとおなじである」(ヨハネ3：8)とされました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそれと同じです。人の

目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちにしたがって新しい人をつくるのです。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものです。聖霊によって心が新たにされるならば、生活がその事実を証明します。

私たちはどのようにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできません。また、自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私たちの生活にあらわれてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起こりますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか過ちでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのです。

別にキリストの力によって新しくされなくても、外見だけは正しい行いをする人がいることは事実です。自分の影響力を高めたい心や、人からよく思われたいとの気持ちから、正しい生活を送ることもできるでしょう。自尊心によって悪と思われることを避けることもあるでしょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることも

あるでしょう。では、私たちがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私たちの心を支配しているのは誰でしょうか。私たちは誰のことを考えているでしょうか。また誰のことを話すのが好きでしょうか。私たちが何よりも愛情をささげ、何よりも努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私たちがキリストのものであれば、彼と心をひとつにし、彼を思うのが一番の楽しみとなり、私たちの持ち物も、私たち自身もすべて彼にささげてしまいます。そして主のみかたちに似ることを望み、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、すべてのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者は、みたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、柔和、自制」(ガラテヤ5：22, 23)を生じるのです。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず、神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩み、そのご品性を反映しながら、イエスが清い方であられたように、自らを清くするのです。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛してい

たものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽はずみで落ち着きのない人は真面目で控えめになり、酒に酔う者はそれをやめ、放蕩者は純潔になります。世的なむなし習慣や流行を追う気持ちはなくなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（1ペテロ3：3，4）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起こらなければ真に悔い改めたとは言えません。担保としてあずかったものを戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったなら、その人は確かに死から生に移っているのです。

あやまちがあり、罪あるままの姿でキリストのもとに行き、ゆるしの恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起こります。キリストの課されるくびきはやさしいのですから、すべての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれているように見えた道も、義の太陽に照らされて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、彼に従う者のうちに

見られるようになります。神のみ旨を行うことがキリストの喜びでした。神の愛と栄光をあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力です。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのです。愛は神から来るものです。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配する人の心にだけ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(1ヨハネ4：19)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに宿り、あたりに高貴な感化を及ぼすのです。

さてここに、神の子ら、特に神の恵みに頼り始めた者がおちいりやすい誤りが二つあります。これは特別に注意しなければならない事柄です。まず第一に、前にも述べたように、自分の行為をながめ、自分の力に頼って神と調和しようとする事です。自分の行為によっておきてを守り清くならろうとする人は、不可能なことをしようとしているのです。人がキリストなしにすることはすべ

て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みだけが私たちを清めるのです。

それとは反対ですが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくてもよいという考えです。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのだから、行いは私たちの救いと全く関係がないと言うものです。

けれども服従というのは、単なる外面だけの同意ではなく、むしろ愛によって奉仕することなのです。神のおきては神のご品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものですから、天にあっても地にあっても神のみ国の基礎です。私たちの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないのでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私たちの心が創造主である神のご品性に似たものとして新しくされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル10：16)という新しい契約が成就されるのです。このようにおきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないで

しょうか。服従、すなわち愛より出た奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしです。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」（1ヨハネ5：3）。「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにはない」（1ヨハネ2：4）と記されています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰—ただ信仰だけが私たちをキリストの恵みにあずからせ、服従できるようにするのです。

私たちは服従によって救いを買うものではありません。救いは神から与えられる無料の賜物であって、信仰によって受けるのです。服従は信仰の実なのです。「あなたがたが知っているとおりに、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」（1ヨハネ3：5，6）。これが本当のテストです。もし私たちが、キリストにあり、神の愛が私たちの心に内住するならば、私たちの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてにあらわされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ、だれにも惑わされてはならない。彼が義人であ

ると同様に、義を行う者は義人である」（1ヨハネ3：7）。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現された神の聖なる律法の標準によって定められるものです。

キリストを信じれば神に服従する義務はないのというのは、信仰ではなくて厚かましい憶測です。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである」（エペソ2：8）とされています。けれども「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである」（ヤコブ2：17）とも記されています。また、イエスご自身も、この地上に来られる前に、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」（詩篇40：9）と言われ、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるとおなじである」（ヨハネ15：10）と言われました。聖書は、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。…『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（1ヨハネ2：3、6）、「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたの

である」（1ペテロ2：21）と語っています。

永遠の命を受ける条件は、私たちの祖先が罪に陥る前、すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることです。もし、永遠の命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開いてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでしょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私たちの性質は墮落し、自分の力では義となることができなくなりました。私たちは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことはできません。神のおきての要求に応じられるだけの義を持ち合わせていません。けれどもキリストは、私たちのために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私たちが会わなければならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪のない生活をお送りになりました。そして、私たちのために死に、今や私たちの罪を取り除いて、ご自身の義を与えようとしておられます。もし自分をキリストにささげ、キリストを自

分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深いものであっても、彼のゆえに義とみなされるのです。キリストの品性があなたの品性の代わりとなり、神の前に全く罪を犯したことの無い者として受け入れられるのです。

そればかりでなく、キリストは私たちの心までも変えてくださるのです。信仰によって、キリストは心のうちに住んでくださいます。こうして、信仰と、絶えずキリストに自分の意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのです。このようにする限り、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ2：20）とすることができるのです。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」（マタイ10：20）と言われました。こうしてキリストが私たちのうちに働かれるならば、私たちは、キリストと同じ精神をあらわし、同じ業—正しい行為、つまり服従をするよう

になるのです。

ですから、私たち自身のうちには、何も誇るどころはなく、自分を高める何の根拠もありません。私たちの唯一の希望は、キリストの義が私たちに宿ることで、これは私たちのうちに、私たちを通して働いて下さる聖霊のみ業なのです。

私たちが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかなければなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることです。神の存在とその力、また聖書が真理であることは、悪魔とその手下も心のうちでは否定できない事実として知っています。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」（ヤコブ2:19）とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信じるといふばかりでなく、神に意志を服従させ、心をささげ、愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は愛によって働き、魂を清めるのです。この信仰によって、心は神のみかたちに創りかえられます。人の心は、新しく創られなければ神の律法に従わず、また従う力もありません。しかし信仰によって新しくされた今は、清いおきてを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのお

きてを 愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」（詩篇119：97）とすることができます。そして、おきての義の要求が「肉によらず霊によって歩く」（ローマ8：4）私たちのうちに満たされるのです。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、果たして自分の心が聖霊によって新しくされたかどうかと疑う人がいます。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私たちは何度となく、欠点やあやまちを悔いてイエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたものではありません。キリストは神の右に座し、私たちのために執り成しをしておられます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ、これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」（1ヨハネ2：1）と言いました。また「父ご自身が、あなたがたを愛しておいでになるからである」

(ヨハネ 16:27)という、キリストの言葉も忘れてはなりません。神は、あなたを神に立ち返らせ、自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすれば、すでにあなたのうちに良いことをはじめられた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けてくださるのです。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、自分を助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす聖霊の力が働いている証拠です。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって創りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私たちが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠です。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りな

い純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えられる救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます。すると、キリストはご自身の力をあらわしてください。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私たちはキリストの品性をもっと深く知るようになり、そのみかたちを十分に反映するようになります。

キリストにある成長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえられています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりの者も、同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(1ペテロ2：2)として「成長し」(エペソ4：15)、キリスト・イエスにある完全な人にまで成長しなければならないのです。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばなければなりません。イザヤも、彼らは「義のかしの木となえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者となえられる」(イザヤ61：3)と言っています。こうして自然界のいろいろな例があげられて、私たちの霊的生活の不思議な真理が理解しやすくなっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の最も小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神が与えられたいのちによるのです。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのです。人は「新しく生まれ」（ヨハネ3：3）ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に来られたのです。

いのちの場合と同様に、成長においてもそうです。つぼみから花を咲かせ、実を結ばせるのは神です。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」（マルコ4：28）ようになるのは神の力によるのです。預言者ホセアはイスラエルについて「彼はゆりのように花咲き」「園のように栄え、ぶどうの木のように花咲き」（ホセア14：5、7）と言っています。またイエスも私たちに、「野の花のことを考えてみるがよい」（ルカ12：27）と言われました。木や花は自分で思いわずらったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えられるものによって、そのいのちが支えられ、生長するのです。子供はどんなに思いわずらって

も、またどんなに努力しても身長を伸ばすことはできません。私たちもこれと全く同じで、心づかひや自分の努力では靈的な成長はできないのです。植物も、また子供たちも、周囲からいのちを支えるもの、すなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要です。キリストは、彼らの「とこしえ・・・の光」（イザヤ60：19）、「日です、盾です」（詩篇84：11）と記されています。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように臨み」（ホセア14：5）、「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」（詩篇72：6）とあります。彼は、生ける水でありパンです。「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」（ヨハネ6：33）。

神はみ子という比類のない賜物を与えて、ちょうど空気が地球のまわりを取りまいているように、恵みの大気で全世界を包まれました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある完全な人となることができます。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲

こうして太陽に向かうように、私たちも義の太陽を仰いで天の光に照らされ、私たちの品性がキリストのかたちになるまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながりよう。枝がぶどうの木につながってなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。……わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」（ヨハネ 15：4、5）とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が成長して実を結ぶには、その幹につながってなければならぬと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らなければなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖さに成長する力もありません。

しかし、彼とつながっているなら栄えるのです。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばないこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならぬことがあると考えている人がたくさんいます。彼らは、キリスト

に頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのです。しかし、そうした努力はみな失敗に終わります。イエスは「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」と言われました。恵みに成長することも、私たちの喜びも、人のために役だつこともみな、キリストと一つになるかどうかにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、彼と交わり、彼のうちにとどまることによります。キリストは、私たちの信仰の創始者であると同時に、これを完成されるお方です。キリストは初めであり終わりであり、いつも共にいてくださる方です。ですから信仰生活の初めと終わりばかりでなく、私たちの歩む道の一步一步キリストにいていただくなくてはなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」（詩篇 16：8）と言いました。

「いったいどうすれば、キリストとつながり続けることができるでしょうか」と尋ねる人がありますが、それは最初に主を受け入れたときと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」（コロサイ 2：

6)、また「わが義人は信仰によって生きる」(ヘブル10:38)とあります。あなたは、自分を神にささげ、完全に神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分では自分の罪をあがなうことも、心を変えることもできませんでした。しかし神に自分をささげ、神がこれらすべてをキリストのゆえになし遂げてくださったと信じたのです。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのです。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることです。自分の心も意志も奉仕もすべてを神にささげ、神のご要求にすべて従わなくてはなりません。そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちておられるキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神に自分をささげ、最初の務めとして、次のように祈りましょう。「主よ、しもべのすべてをあなたのものとしてお受け入れください。私のすべての計画をあなたのみ前に置きます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用いください。どうか、私と共におられて、すべ

てのことをあなたにあってなさせてください」と。これは毎日のことです。毎朝、その日一日、神に献身して、すべての計画を彼にお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手にゆだねるとき、あなたの生涯がもっとキリストの生涯に似てくるのです。

キリストにある生涯は、平和な生涯です。感情の興奮はないかもしれませんが、いつも変わらない平和な信頼をもった生活です。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と一つになります。すると私たちは、自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖さ、またそのたとえようもない愛を魂の瞑想課題としましょう。キリストを愛し、キリストにならい、全くキリストに頼るときはじめて、私たちはキリストのみかたちに変えられていくのです。

イエスは「わたしにつながっていなさい」（ヨハネ

15：4)とされました。この言葉には休み、安定、信頼と言う意味が含まれています。またイエスは私たちが招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11：28)とされました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」(詩篇37：7)と言っています。またイザヤも、「穏やかに信頼しているならば力を得る」(イザヤ30：15)と言いました。この休みは何もしないことの中にあるものではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待は、働きに対する召しも伴っているからです。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ11：29)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に、活動的に、キリストのために働くのです。

自分のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快樂、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはその

どれかに私たちの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は自分の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストから離して、ついには勝利を得ようと願っています。私たちは、自分を中心に考えて、本当に自分は救われるだろうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私たちの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神にゆだねて、神を信頼し、キリストのことを語り、考え、自分をキリストのうちに消失させてしまわなければなりません。すべての誘惑を捨て、恐怖を追い出し、使徒パウロと共に「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしの内に生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ2:20）と言いましょ。神を信じて安心していきましょう。神は、ご自分に頼ってくる者を必ず守られるのです。もし、神のみ手に自分を任せるならば、あなたを愛される神は、あなたを勝利者としてくださるのです。

キリストは、人性をおとりになったとき、愛の絆で人間をご自身に結びつけられました。この絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力も切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとして、私たちが自分から選んでキリストから離れるように誘惑してきます。

そこで私たちは、ほかに主を選ぶというような誘いに乗らないよう警戒し、努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由です。キリストから目を離さないかぎり、キリストは私たちを守ってくださいます。イエスをながめていれば私たちは安全であって、何もかもイエスのみ手のうちから私たちを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私たちは、「主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」（Ⅱコリント 3：18）ようになるのです。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのです。弟子たちは、キリストのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見だし、ついにイエスに従ったのでした。彼らは、家の中でも、食卓でも、

密室でも、野外でも、いつも主と共に過ごしました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように、毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また彼らは、僕が主人に仕えて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ5：17）であって、彼らも罪に対して、私たちと同じように戦わなければなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのです。

救い主のみかたちをいちばんよく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は、差し出がましく名譽心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、何か害でも受けるとすぐ怒り散らしました。けれども、高潔なキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強さと忍耐深さ、権威と優しさ、犯しがたい尊厳を持ちながらも謙遜であるというその姿をながめて、彼の魂は賞賛と愛で満たされました。日一日と、彼の心はキリストに引きつけられ、ついに、主を愛するあまり自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい、野心満々の気質はキリストの感化力に屈服し、聖霊の更生力が彼の

心を新しくしました。つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのです。これは、イエスと一つになった確かな証拠です。キリストが心のうちに住まれるとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのです。

キリストが昇天されたときも、主はなお共におられるという確信を弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的な存在でした。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えられた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられました。天使の群れがイエスを受け止めると、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：20）という救い主のみ言葉でした。イエスは、人のかたちのまま昇天されました。弟子たちは、イエスが神のみ座の前にもなお自分たちの友であり、救い主であり、また思いやり深い点においても変わりがなく、悩み苦しむ人類と強い関係にあることを知っていました。イエスは、彼のあがなわれた者のために払った価の記念となった手足の傷を示して、ご自分の尊い血の功績を神

の前に述べておられるのです。弟子たちは、イエスが天に昇られたのは場所を備えるためであって、再び来られて、自分たちを受け入れてくださるということも知っていました。

主の昇天後、彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心に願いと祈りをささげていました。厳粛なうやうやしい気持ちをもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながらか祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」（ヨハネ16：23、24）。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなしてくださるのである」（ローマ8：34）という確証をもって、彼らは信仰の手を高く高く伸ばしたのです。こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」（ヨハネ14：17）と言われた慰め主、聖霊がペンテコステのときに彼らに与えられたのです。キリストは「わたしが去っていくことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなけれ

ば、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたのためにつかわそう」（ヨハネ 16：7）と言われましたが、それ以来、キリストは聖霊を通して常にその子らの心のうちに住まれるのです。こうして、彼らは、この地上に主がおられたときよりいっそう近く、主と一つになることができたのです。内住されるキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」（使徒行伝 4：13）を知るようになったのです。

キリストは、最初の弟子たちに対してなされたのと同じことを、今日も、その子らになさりたいと望んでおられます。それは、少数の弟子の前で祈られた最後の祈りの中で「彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします」（ヨハネ 17：20）と言われたことによってもわかります。

イエスは私たちのためにも祈られ、ご自身が天の父と一つであられたように、私たちも天の父と一つになるようにと願われました。これはなんという尊い一致でしょう。救い主もご自身について「子は……自分からは何事もすることができない」（ヨハネ 5：19）、「父

がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」（ヨハネ14：10）と言われました。もしキリストが私たちの心のうちに住んでくださるならば、キリストは私たちのうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」（ピリピ2：13）てくださるのです。キリストがお働きになったように私たちも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私たちは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」（エペソ4：15）するようになるのです。

Chapter 9

人生と活動

神は、万物の、いのちと、光と、喜びの源です。ちょうど太陽から広がる光線のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神からすべての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって周囲に広がっていきます。

私たちの救い主の喜びは、墮落した人間を向上させてあがなうことでした。そうであればこそ、彼はご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび、恥をもいとわれませんでした。天使たちもまた、他の幸福のために働くことを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また性格や能力が劣った人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を、罪のない天使

たちがしているのです。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲の愛の精神です。これこそ、天の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たなければならない精神であり、行わなければならない働きです。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしい香りのように隠すことはできません。その清い感化は、その人に接するすべての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出てすべてをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働かれたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにあるすべての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。彼は、根気強く、熱心に失われた人類の救いのために労されました。かいばおけからカルバリーに至るまで、彼は自己否定の道をたどられ、困難な働き、苦痛の多い旅、次々と押し寄せる人々の頼みごとなど、どのような苦労も避けようとはされません

でした。彼は「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マタイ 20：28）と言われました。これがキリストの生涯の一つの重要な目的でした。そのほかのことは第二義的なもの、付随的なものでした。神のみ心を行い、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でした。彼の働きのうちには、私心とか私欲とは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲も払い、キリストがいのちを与えられた他の人々も、天の賜物を受けることができるようになります。彼らはできる限りを尽くして、この世を少しでも住みよい世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのです。キリストのもとに来た人はすぐに、イエスがどれほどすばらしい友であるかを他の人に知らせたいと望むようになります。人を救い清める真理は、どうしても心の内に閉じ込めておくことはできないのです。私たちがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできません。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるもの

です。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなります。そして、彼らにキリストの美と、見えない世界の現実性について話したいと思うでしょう。またイエスがたどられた道を歩みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1：29）を仰がせたいと切望するようになるでしょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私たちをあがない、計画の一部に携らせてくださるのはこのためです。神は、人に神の性質を持つ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分け与えるためです。このことは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びです。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにいることになるのです。

神は、福音宣伝の働きだけでなく、すべての愛の奉仕を、天使にお任せになることもできました。また、別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私たちを、神ご自身、キリスト、天使と共に働くものとして選び、自分を忘れて働くことからくる祝福、喜び、霊的向上に私たちをあず

からせてくださったのです。

私たちは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと一つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はどれもみな、与える者の心をますます情け深くして、「主は富んでおられたのに、あなたがたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（II コリント 8：9）と記されている世のあがない主に、いっそう近く結びつけます。こうして、私たちを創造された神の目的を果たすときにはじめて、生きていることが私たちの祝福となるのです。

もし、キリストがその弟子たちに望まれたように働き、主に魂を導こうとするならば、私たちは神についてのもっと深い経験と、さらに広い知識の必要を感じ、飢えかわくように、義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練にあえば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験へと導かれるのです。

自分を忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなるわしさを加

え、平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうしてクリスチャンの美德を実行する人は成長し、強くなり、神のために働きます。彼らは、靈的なことをはっきりと理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し、祈りにおいて力を増し加えます。神の霊が人の心に触れて働くとき、それに答えて心は清らかな調べを奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのです。

恵みに成長するただ一つの方法は、キリストがお命じになった働きを、自分を忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私たちの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることです。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受けるだけで、キリストのために何もしていないながら、クリスチャンのいのちを保とうとしている人は、働かないで、ただ食べるだけで生きようとしているのと同じです。自然界と同じように、靈的な世界でもこれでは衰えてしまうしかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチ

ヤンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのです。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命です。そして、その義務は、クリスチャン一人ひとりの肩に負わされていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を実行しなければなりません。私たちにはキリストの愛があらわされたのですから、キリストを知らないすべての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私たちのためばかりでなく、他の人を照らすためにも光を与えられたのです。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務に目覚めるならば、今日ただ一人いるところに数千の者がいて、異教の地に福音を述べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的に神様の働きに従事できない人は、資金によって、または同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国において、もっと熱心な努力があつてよいはずです。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私たちは異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭の中でも、教会でも、あるい

は私たちと交際する人、取引する人々との間でも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分を、ナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が、人から認められたり、あがめられたりすることもなく、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときに、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業に従事しておられたときも、病人をいやしたり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上を歩かれたときにも、同じように忠実にその使命をお果たしになりました。ですから私たちも、この世の最低と思われるような仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩き、イエスとともに働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態、神のみまえにいるべきである」（1コリント7:24）と言っています。たとえば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、すべて自分の信じている宗教に従って行動し、キリストの精神を人々にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で貧しい手仕事に励まれたイエスを代表することができます。

す。キリストのみ名を名乗る者は誰でも、他の人がその良い行いを見て、彼らの創造主、あがない主をあがめるように導かなければなりません。

他の人々の方が、自分よりもすぐれた才能や機会に恵まれているからと言い訳をして、自分の賜物をキリストの奉仕に用いない人が多くいます。ただ特別な才能を持っている人だけが、神のために才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、一部の特別な人々にだけ与えられているので、それ以外の人々は働きをするよう召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人がいます。しかし、たとえには、そのようにあらわされてはいません。この家の主人はしもべたちを呼んで、それぞれに仕事を与えました。

愛の精神を持って、この世のどんな小さい仕事も「主に対してするように」（コロサイ3:23）することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよい香りが私たちを包み、私たちの感化は他の人々を高め祝福するのです。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく、特別な才能など持たなくても良いのです。人

からどう思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあらわし、人々のために何か益になりたいと望んでいることが人々にわかれば、その努力は決してむだにはならないのです。

イエスのどんな小さく貧しい弟子でも、他の人々の祝福となることができます。彼らは自分が特別に善いことをしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広く深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きなことをしていると感ずることもなく、知ることもありませんが、成功するかどうかなど思いわずらう必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えられた仕事を忠実にすれば、その生涯はむだにはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と共に働いて、やがて訪れるみ国でのより高い働きと、限りない喜びを受けるのにふさわしい者とされるのです。

神についての知識

神は多くの方法を通してご自身を私たちに知らせ、私たちを神との交わりに導いておられます。自然は絶えず私たちに語りかけています。心を開いているなら、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に感動するのです。また、耳をすましているならば、自然を通して神がお語りになっているのを聞くことができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、流れる雲、雨のしずく、小川のせせらぎ、天の栄光などはどれも私たちの心にささやいて、それらいっさいを創造された神を知るように招いています。

私たちの救い主は、尊い教訓を、自然界の事物と関連づけてお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろな出来事などを

みな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようにされました。

神は、私たちがみ手のわざを尊重し、また、私たちの地上の住まいを単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾ってくださったことを感謝するよう望まれます。神は美を愛されますが、外面的などんな美しさよりも、品性の美しさを愛されます。神は私たちが、花のように、純潔、単純で、静かな優しさを養うよう望んでおられます。

また、私たちが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えてください。果てしない天空にあって、昔から定められた軌道を進む星から、最も小さい原子にいたるまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造されたすべてのものを、守り支えておられます。広い宇宙の無数の諸世界を支えられる神は、同時に、何の恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要も顧みられるのです。人が一日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持ちが豪華な邸宅で祝宴を開くときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事を

するときも、その一つ一つを天の父はやさしく見守っておられます。どんな涙も神の目にとまらないものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もし私たちが、これらのことを固く信じるならば、よけいな思いわずらいはなくなります。そして、人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きいことも小さなことも、すべて神のみ手におまかせすることができるのです。こうしてはじめて私たちは、多くの人々が長い間知らなかった、魂の安息を味わうことができるようになります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない、やがて訪れる世界のことを考えてみましょう。そこには、もう呪いの影は見られません。救われた者が入る天の都のことを考えてみましょう。それは、どんなに想像力をたくましくしても描き出すことができないほどの、立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾られますが、それでも私たちは、神の栄光のかすかな光を見ているだけなのです。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者た

ちのために備えられた」(1コリント2：9)と記されています。

世の詩人や自然科学者たちは、自然について多くのことを歌いあるいは語ります。けれども、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのは、クリスチャンだけです。なぜなら、彼らはそこに天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわされた神の愛を認めるからです。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛の表現であることをわからない人は、その存在の意味を十分に悟ることができません。

神は、摂理を通して、また心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私たちの事情や環境、つまり私たちのまわりで毎日起きている変化の中からも、私たちが心を開いて見ようとするなら、尊い教訓を得ることができます。詩篇記者は神の摂理の導きを振り返って、「地は主のいつくしみで満ちている」(詩篇33：5)、「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」(詩篇107：43)と言いました。

神は、聖書を通して私たちに語っておられます。み言葉を通して私たちは、神のご品性について、神が人間を

導かれる方法、また救いの偉大な働きについて、はっきりと理解することができるようになります。そこには父祖たちや預言者たち、また昔の聖者たちの歴史が繰り返られています。彼らは「私たちと同じ人間」(ヤコブ 5:17)であって、私たちと同じように失望と戦い、また、私たちと同じように誘惑に負けましたが、再び勇気を出して、神の恵みによって勝利することができるようにされました。このことを知るとき、私たちも、義を追い求めて戦っていかなければならないと励まされるのです。彼らの尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが恵みによって行った働きについて知るとき、彼らに靈感を与えた同じ神が、私たちの心にも、そうしたいという励む気持ちを起こさせ、彼らの品性に似る者になりたい、彼らのように神と共に歩きたいと望むようになります。

イエスは、旧約聖書について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」(ヨハネ 5:39)と言われましたが、新約聖書についてはもっとそうです。私たちの永遠のいのちの希望は、あがない主であるキリストにあります。聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、一つとしてこれによらないも

のはなかった」(ヨハネ 1 : 3)という創造の最初の記録から「見よ、わたしはすぐに来る」(黙示録 22 : 12)という最後の約束まで、私たちはキリストのみわざについて読み、キリストのみ声を聞くのです。もし、救い主を知りたいと思えば、聖書の研究にまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉は、激しい渇きをいやす生命の水です。また、天からの生命のパンです。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」(ヨハネ 6 : 53)と言われました。そして、それをご自分で説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」(ヨハネ 6 : 63)と言われたのです。私たちの体は、私たちが飲んだり食べたりするものから成り立っています。霊的な世界においても自然界と同じであって、私たちの考える内容が私たちの靈性に力と健康を与えるのです。

さて、罪のあがないの問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠にわたって、救われた者の科学であり歌となります。ですから、罪のあがないの問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないで

しょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私たちのために払われた犠牲は、私たちが真面目に考えなければならぬ問題です。私たちは、愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、神の民を罪から救うためにこの世に来られたその使命を、深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えると、私たちの信仰と愛はますます強くなり、私たちの祈りはもっと神に受け入れられるものとなります。というのは、信仰と愛とがもっと祈りの中に織り込まれるようになるからです。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠のこもったものとなります。そして、たえずイエスを信頼し、彼によって神に来る者をすべてお救いになるイエスの力を、毎日体験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私たちも全く新しくされて、救い主の純潔なお姿のように造り変えられたいと望むようになります。愛する救い主に似た者になりたいと、飢え渴くように求めるのです。キリストについて考えれば考えるほど、キリストのことをほかの人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたものではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、

救いに必要な大真理は真昼のように明らかに記されています。人が、このはっきりとあらわされた神のみ心を捨て、自分の判断に従ったりしない限り、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人の言葉に左右されず、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし私たちが、当然自分で考えなければならないことを、他人任せにしているようでは、活力は失われ、才能は衰えてしまいます。精神の尊い能力も、集中して思考する価値ある問題がないために委縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を悟る力を失ってしまいます。聖句と聖句を対照しながら、霊的なことは霊によって、聖書の主題がどう関連し合っているかを研究すれば、知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど、知性を高め強めるのに適切なものではありません。どんな書籍よりも、聖書の高尚で広範な真理ほど、人の思想を高め、才能を強めるものではありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するなら、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができるようになりますが、今日そのような人はほとんど見る事ができません。

ただ聖書を急いで読んだだけでは、ほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を理解することができないのです。しかし、わずか一節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにするなら、それは多くの章を、このことを知りたいという目的もなく、何か大切な教訓を得ることもなく読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、時間を見つけて読み、心にしっかり記憶させましょう。たとえば道を歩いているとき、一節でも読んでこれを黙想するとそれが頭に残るものです。

熱心に注意深く、たえず祈りながら学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書には、わかりやすく書かれていて間違ふ余地がないところもあれば、また表面に意味があらわれていなくて、ざっと見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句と聖句とをよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えなければなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている価値ある鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のように探すならば、不注意な探究者の目にはとまらな

い価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された靈感によるみ言葉は、いのちの泉からわき出る流れのようになります。

聖書は、決して祈りをささげないで研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らなければなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスのもとに来たとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない」と驚きの叫びをあげられました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」（ヨハネ 1：47, 48）と答えられました。イエスは、私たちが真理とは何かを知りたいと光を求めるなら、隠れた場所で祈っていたとしても必ず見ておられます。心を低くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのです。

聖霊は救い主をあがめ、その栄光を讃えます。聖霊の役割は、キリストが私たちと共におられることを教え、キリストの義の純潔さを示し、キリストを通して与えられる救いがどれほど素晴らしいものであるかを伝えるこ

とです。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ16:14)と言われました。真理の霊だけが、神の真理を正しく教えることのできる教師です。人類は、神の目にどれほど価値ある存在として見られていることでしょうか。神は人のために、そのひとり子を遣わして死を与えられ、また聖霊を人の教師として、いつも側にいてくださる案内者としてくださったのです。

祈りの特権

神は、自然と聖書、摂理、および聖霊の感化を通して私たちに語られます。しかしそれだけでは十分ではありません。私たちもまた、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私たちの天の父と実際に交わらなければなりません。私たちは、心が神に引かれ、神のみわざ、あわれみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私たちの毎日の生活について、何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることです。これは、私たちがどのようなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私たちが神を受け入れるのに必要だからです。祈りは、神を私たちのと

ころへ呼びおろすのではなく、私たちが神のもとへと引き上げるのです。

イエスは、この世界においてになったとき、弟子たちにどのように祈るかを教えられ、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるように指導されました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私たちに対する保証でもあります。

イエスご自身も、人々の間に住んでおられたとき、たびたび祈られました。救い主は、ご自分も私たちと同じように、欠乏と弱さを覚えて、義務や試練に耐えるための新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりました。彼は、すべてのことにおいて私たちの模範です。彼は、弱い私たちの兄弟となり、「すべてのことについて、私たちと同じように試練に会われ」しました。しかし、罪のないお方でしたから、そのご性格が悪を退けたのでした。彼は罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えられました。彼の人間性は祈りを必要とし、また特権とされました。イエスは、父なる神と交わられることにより、慰めと喜びを受けられました。人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要を感じられ

たのですから、弱く罪深い人間には、どれほど熱心な、絶え間ない祈りがなければならないことでしょう。

私たちの天の父は、あふれるばかりの祝福を私たちに与えたいと待っておられます。限りない愛の泉から、命の水を豊かに飲むことは私たちの特権です。それなのに私たちがほんの少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでしょう。神は、その子らのどんなにみじめな者であっても、心からの祈りには喜んで耳を傾けようとしておられます。それなのに、私たちの方で、私たちの願いをなかなか神にお知らせしようとしません。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私たちが求めたり、思ったりする以上に与えようとしておられるのに、誘惑に負けやすい、哀れな力のない人間が、ほんの少ししか祈らず、小さな信仰しか表さない様子を見て、天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のそば近くにいることを喜び、神と交わることを最高の喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光を受けることも、神との生きた交わりもなく、満足して日を送っているように思われるのです。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪を犯させようとします。それはただ私たちが、神の定められた祈りの特権を用いないからです。祈りは、全能の神の、無限の資財が蓄えられている天の倉を開く、信仰の手に握られた鍵です。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。絶えず祈り、忠実に見張っていなければ、私たちは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道をさえぎって、私たちが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐えるための恵みと力を受けられないように絶えず働いています。

神が私たちの祈りを聞き、それに答えられるには一定の条件があります。まず第一に、私たちは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は、「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ44:3)と約束しておられます。飢え渇くように義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのです。聖霊の感化を受けることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私たちが大きな必要を感じているということは、それ自体が、動かすことのできない理由であり、私たちのた

めに最も雄弁に語ってくれます。けれども私たちは、それらの必要を満たしてくださる方として神を求めなければなりません。彼は、「求めよ、そうすれば与えられるであろう」(マタイ7:7)と言われました。また、「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜らないことがあるか」(ローマ8:32)とも言われています。

もし、心に不正のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主はわたしたちの祈りに耳を傾けられません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞いてくださるのです。心に覚えのある悪をすべて正したときに、神は私たちの願いを聞いてくださると信じることができます。もちろん、私たち自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私たちを救うのはイエスの功績であって、わたしたちを清めるのもイエスの血です。しかし受け入れられるには、私たちにもしなければならぬことがあります。

力ある祈りのもう一つの要素は信仰です。「神に來たる者は、神のいますことと、ご自身を求めらる者に報いて

下さることとを必ず信じるはずだからである」(ヘブル 11:6)。イエスも「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ 11:24)と弟子たちに語られました。私たちは、み言葉をこの通りに受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺なものですが、誠実な神の約束です。私たちが祈ったときに、求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私たちの祈りを聞き、答えてくださることを信じなければなりません。私たちは間違いが多く、先を見ることができませんので、自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え、私たちのために最も良いものをお与えになるのです。それは、もし私たちが天からの光に目が開かれ、すべてのものの真実の姿をながめることができたなら、私たち自身も必ず求めるものです。私たちの祈りが聞かれないように見えるときも、約束にかたく頼らなければなりません。なぜなら、祈りが答えられるときが必ず来て、私たちが最も必要とする祝福を受けるようになるからです。けれども、祈りはいつもわたしたちが望んだように答えられ、または、

望んだ通りのものが必ず与えられると考えるのは、独断にすぎません。知恵に満ちておられる神は、決して誤ることなく、また、正しく歩む者に良いものを拒まれることはありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ7：7)という神の確かな約束を信頼しなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持つようとするなら、私たちはますます迷いの深みに陥るばかりです。けれども、もし私たちがありのままの姿で、自分の力なさ、頼りなさを感じて神のもとに行き、限りない知恵を持たれる神に、謙遜に信頼をもって私たちの必要を告げるなら、造られたすべてのものを見守り、み旨とみ言葉をもってすべてを支配しておられる神は、私たちの叫びに耳を傾け、心に光を照らしてください。真心からの祈りを通して、私たちは無限の神のみ心に触れるのです。そのとき、あがない主が、愛とあわれみに満ちて私たちをながめておられるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実です。また彼のみ手の接触を実際には感じなくても、愛とあわれみに満ちたやさしいみ手は、私たちの上に置か

れているのです。

神のあわれみと祝福を求めるときは、私たちの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください」(マタイ6：12)と祈りながら、他人をゆるせない気持ちを持っておられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれることを期待するなら、自分がゆるされたいと望むような態度と程度で、同じように人をゆるさなければなりません。

忍耐して祈ることは、祈りが聞かれるためのもう一つの条件です。信仰と霊的経験に成長したいと望むなら、私たちは絶えず祈らなければなりません。私たちは「常に祈り」(ローマ2：12)、「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ4：2)なければなりません。ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(1ペテロ4：7)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ4：6)と教えています。またユダは「しかし愛する者たちよ、あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神

の愛の中に自らを保ち」(ユダ20、21)なさいと言っています。絶えず祈るとは、魂がいつも神と結びつき一致していることであって、神の生命力が私たちの命の中に流れ込み、私たちの生活から純潔と聖潔とが神に帰っていくことです。

祈りは努めてしなければなりません。何ものにも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを、常に保つことができるよう、全力を尽くさなければなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かなければなりません。神とほんとうに交わりたいと求める人は祈禱会に出席し、自分の義務を忠実に果たし、できる限りの利益を得ようと思って熱心です。彼らは、天からの光を受けられる所へはできるだけ機会を作って出かけます。また、家族と共に祈らなければなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂の命であるからです。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分です。人のいないところに退いて、心を探られる神のみ前に心をすっかり開かなければなりません。密室の祈りは、祈りを聞かれる神にだけ聞かれるべきで、

好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることはありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。そのとき、隠れたことを見ておられ、心からの祈りに耳を傾けられる神から、うるわしく、永久的な感化を受けられるのです。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのです。神は、私たちの力の源です。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をするときにも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのです。黙禱は、恵みのみ座の前に尊い香りのように上っていきます。このように、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのです。

神に祈りをささげるのに、不適當な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって、心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏の中でも、商売の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げたときのように、神に願いをささげて導きを請うことができます。祈りの密室はどこにでもあります。私たちは、絶えず心の戸を開いて、

イエスを天来の客として心のうちに住んでいただくよう招待しなければなりません。

たとえ私たちは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中で生きることができるのです。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らないようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようとして心を開いている者は、この世の人より清い雰囲気の中を歩き、天と絶えることのない交わりを続けることができます。

私たちはイエスをもっとはつきりながめ、永遠の実在の価値をもっと十分に知らなければなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、このことが成就するために、私たちは、天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させてくださるよう、心を世から離して天へ向けましょう。もし、私たちが神のそば近くにいるなら、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように、私たちの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、わずらい、恐れもみな神の前に置きましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。頭の髪の毛でさえ数えられる神は、子どもたちの必要に無関心ではありません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ5：11)とあります。愛に満ちた神は、私たちが悲しみを口にするだけでも心をいためられます。心をわずらわせるようなことは、何でも神に告げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙のすべてを支配しておられるのですから、神にとって大き過ぎて支えきれないというものはありません。私たちの平和に関わることならどんなことでも、小さ過ぎてお気づきにならないということはないのです。私たちのどんなに暗い経験も、暗過ぎてお読みになれないということはありません。また、どんな難問題でも、神には解釈できないということはありません。神のごく小さい者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も、喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払っておられるのです。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇147：3)。神と人々の魂との関係は、あたかも神

が、ただその一人のために愛するみ子を与えられたように、はっきりとした完全なものです。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言えない。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」（ヨハネ 16:26, 27）。

「わたしがあなたがたを選んだのである・・・あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」（ヨハネ 15:16）と言われましたが、イエスの名によって祈るとは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるというのではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それと共に、イエスの約束を信じ、その恵みに頼り、彼がなされた働きを行うということなのです。

神は、私たちが礼拝に専念するからといって、この世から離れて世捨て人となったり、修道僧になることを望んでおられるのではありません。私たちの生涯はキリストの生涯のように、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることを止めるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいま

す。人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働かれた主のために働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神に献身する動機も同時に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要や、キリストの王国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理は輝きを失い、その重要性を悟れなくなってきました。そして、私たちの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャン同士の交わりにおいて、お互いの間に同情心がなければ大きな損失となります。自分だけで閉じこもっている人は、神が計画されたその人の立場を占めていないのです。私たちが社交性を積極的に養い育てていくなら、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても成長と、力強さが与えられます。

もしクリスチャン同士が、互いに交わって、神の愛と尊い救いの真理について語り合うなら、自分の心が新

たにされるだけでなく、互いの心が活気づけられるのです。私たちは毎日、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに体験するのです。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に語れば自分の心が温められ勇気づけられるのです。もし私たちが、もっとイエスのことを思ったり語ったりして、自分について考えることを少なくするなら、彼の臨在をより近く感じる事ができるのです。

神は私たちを常に守っておられますから、いつも神のことだけを考えたと思えば、常に心に神を宿し、喜んで神について語り、神を賛美しなければなりません。私たちがこの世的なことを話すのは、それに興味を持っているからです。友だちのことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからです。けれども私たちは、この地上の友を愛する以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い、神のあわれみ深さや、神のみ力について語るのは、全く自然なことではなければなりません。

神が私たちにお与えになった賜物があまりにも豊かなために、私たちの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むし

ろ、これらの賜物は、常に私たちに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深い神に結びつけるためのものなのです。私たちは、とかくこの世のことに心を奪われがちですが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来る人々を、いつも救うことができる」（ヘブル7：25）キリストの顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私たちは、もっと「主のいつくしみと、人の子らになされたくすしきみわざとのために」（詩篇107：8）神をほめたたえなければなりません。私たちの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私たちは祈ることが本当に少ない上に、感謝の心が乏しい者です。絶えず神のあわれみを受けていながら、感謝を言い表すことがなんと少なく、神が私たちのためにしてくださったことについて賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、神は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべてのものを喜び楽しまなければならない。

これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」（申命記12：7）と。神の栄光のためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持ちや憂うつな気持ちでなされてはなりません。

私たちの神は、優しくあわれみのある父です。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携ることは喜びでなければなりません。こんなにも大きな救いをお備えになった神は、その子らが、神を厳しく無情な監督であるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私たちにとって最もすばらしい友です。そして、私たちが神を礼拝するときには、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてみてください。主は、神の子どもたちが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望まれます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守りと愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んですることができ、神の恵みによって、すべてのことを正直に忠実にすることができるようにと望んでおいでになります。

私たちは十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、彼が十字架に釘づけられことが、私たちの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けたすべての恵みを心にとめて、その大きな愛に気づいたならば、私たちのために十字架に釘づけられたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私たちの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私たちも感謝をささげるならば、天の軍勢の礼拝に近づくことができるのです。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあげめる」（詩篇50:23）とあります。私たちも「感謝と歌の声」（イザヤ51:3）をささげながら、喜びと敬虔な思いをもって創造主のみ前に行きましょう。

疑いをどうするか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また理解に苦しむことが多くありますから、悪魔はそれらを用いて、聖書が神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができるでしょうか。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと困難から解放されることができるでしょう」と尋ねます。

神は、私たちに、信仰の土台をしっかりと築くことができる証拠を十分に与えた上でなければ、信じるようには求められません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私たちの理性に訴えるあかしによって

確立されており、しかもそのあかしは数限りなくあります。けれども、神は、疑う余地を全く取り除かれたのではありません。私たちの信仰は、外面的なものの上ではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが、本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分な証拠を発見することができます。

有限な心をもって、無限の神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能なことです。どんなに鋭い知性の持ち主にも、どれほど高い教育を受けた人にとっても、聖い神は神秘に包まれていてよくわからないのです。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」（ヨブ 11：7, 8）とあります。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」（ローマ 11：33）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても、「義と正とはそのみくらの基である」（詩篇 97：2）のです。こうして私たちは神が私たちを扱われる方法や、なぜそう

されたのかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りない愛とあわれみとが結びついているのを認めることができます。また私たちの益である限り神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心にお任せしなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じように、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書にしるされている多くの問題は、きわめて深い神秘ですから、人間の頭脳ではとうてい説明することも、十分に理解することもできないのです。けれども、神の摂理の奥義を理解できないからといって、神のみ言葉を疑う理由は何もありません。自然界においても、私たちのわからない不思議なことがいつでも身の周りに起こっています。最も単純な生物であっても、どんなに賢明な学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どこを見ても、私たちの理解できない驚異があるのですから、霊の世界において私たちの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはありません。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのです。神は聖書の中に、聖書が神からのもので

ある証拠を十分に与えておいでになるのですから、神の摂理を全部理解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈を施して、自分の滅亡を招いている」（Ⅱペテロ3:16）とっています。聖書の難解なことが、懐疑論者が聖書を攻撃する論拠となっていますが、このことがかえって聖書が神の靈感によるものであるという強力な証拠なのです。もし聖書の神についての記録がわかりやすいことばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心でも理解できるとすれば、聖書は間違いなく神からのものであるという証拠はなくなるのです。

聖書に示されている広大で神秘的に満ちた主題は、聖書を神のみ言葉として受け入れる信仰を呼び起こすはずで、聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要や欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、どんなに無学な人にも、救いの道を知らせることができるのです。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとら

え、人間の理解力のとうてい及ばないものですから、神がそのように明言されたということを根拠にして、それをそのまま受け入れることができるのです。このように救いの計画は明らかに示されていますから、だれでも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定められた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのです。しかも、このようにやさしく理解できる真理のかけに神秘が潜み、見えない神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのですが、真面目に真理を求めている人には敬虔な思いと信じる心を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、この偉大な神の啓示の前に、人間の理性はひれ伏すほかないのです。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、有限な人知では、無限を悟るには不十分であると認めることにすぎません。つまり、人間の限られた知識によっては全能者の目的を理解することはできないのです。

懐疑論者や無神論者は、すべての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定して

います。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ、気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」（ヘブル3：12）と言いました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されている限り「神の深みまで」（1コリント2：10）探ることは正しいことですが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表されたことは長くわれわれに・・・属」（申命記20：28）するものです。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、ある種の誇りが起こり、聖書のすべての点を自分の満足できるまで説明できないと、短気を起こし失望する人がいます。彼らは、靈感によるみ言葉を理解することができないと自分で認めることは、あまりにも屈辱であると考えます。そして、神が適当なときにその真理を示されるまで、忍耐して待とうとしません。また、何の援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、一般に聖書の教理として信じられてい

るものの中には、聖書にそのような根拠を全く持たないばかりか、かえって神の示された主旨と正反対のものも少なくありません。こうしたことが、多くの人たちに疑いを起こさせ困らせているのです。しかし、これは神のみ言葉のせいではなく、み言葉を曲解した人間のせいなのです。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、そこまで到達したとするなら、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達も止まってしまいます。そうすると、神はもはや至高者ではなくなり、知識と学識に到達した人類には、これ以上の進歩の余地はなくなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝しなければなりません。神は無限のお方です。「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ 2：3）とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのです。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでおられますが、この知識を得る道はただ一つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのですから、その聖霊の光に照らされては

じめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」。「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるものだからである」（1コリント2：11，10）。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう・・・わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」（ヨハネ16：13，14）と約束されました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望まれます。聖書の研究は、他のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を絶対化しないように気をつけなければなりません。これは弱い人間にありがちなことです。聖書が難しく理解できないとか、ごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼な子のような単純な信仰を持ち、教えられる気持ちで聖霊の助けを求めなければなりません。神の力と知恵、神の偉大さなどはとうてい私たちには理解できないことを知れば、それは私たちを謙遜にし、ただ聖書を開くときであっても、神の前に出るかのような、うやうやしい気持ちにさせるのです。聖書を学ぶにあたっては、そこに私たちの理性以上の権威を

認め、心も知性も「わたしはある」と言われた偉大な神のみ前にひざまずかなければなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのですが、神は、それを理解しようと求める人々には、わかりやすく単純にしてくださいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでも何の利益も受けず、かえってそれによって大きな害を受けている人々もいます。敬虔な心と祈りなしに神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ、聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのです。敵が思想を支配して、正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めているなければ、いくら教育がある人であっても、聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険です。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人です。偏見をもって見てしまうため、ほんとうはわかりやすく単純な事柄でも、何かと理屈を言っただけの疑い信じようとしません。

いろいろな仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の

真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は、高慢な、罪を愛する人々には歓迎されません。神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのです。真理に到達するには、真理を知りたいという真面目な望みを持って、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は、聖書が神のみ言葉であるという証拠を数多く見だし、その真理を理解し自分のものとして救いに至るのです。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ7：17）と言われました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、さらに大きな光が与えられるのです。はっきりと理解できた義務をすべてキリストの恵みによって実行すれば、今は疑いを持っているようなことも理解できて、実行できるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証です。神はみ言葉の真実なこと、約束の真実であることを私たち自身が試し

てみるようにと言われました。神は私たちに「主の恵みふかきことを味わい知れ」（詩篇34：8）とお命じになりました。他の人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい。そうすれば、与えられるであろう」（ヨハネ16：24）と言われたのですから、この約束を間違いなく果たしてください。神の約束は今まで果たされなかったこともなければ、これからも果たされないことはありません。そして私たちがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私たちの疑いも暗さも消え去ってしまうのです。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださった」（コロサイ1：13）と言っています。そして死から生へと移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ3：33）とすることができるのです。そして、その人はあかしして言います。「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えは満たされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がなぜイエスを信じるのか

とお尋ねになりますか。それは、イエスが私にとって天よりの救い主であるからです。どうして私が聖書を信じるかと言えば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからです」と。私たちは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であることをあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができます。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識において、ますます豊かになりなさい」（Ⅱペテロ3：18）と言いました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますますはっきりと理解できるようになります。そして、聖い真理に新しい光と美を認めるのです。このことは各時代の教会史を通して歴史が証明していますが、なお終末まで継続するのです。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」（箴言4：18）。

私たちは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接触れ合うとき、神が約束されたように知能が伸びる

ことを信じます。そのとき、神のみ摂理のうちに私たちが悩んだことはみな明らかにされ、わからなかったことも説明できるようになります。そして、私たちの限りある心ではただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見ることでしょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて見るであろう…しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」（1コリント13：12）。

Chapter 13

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたのですから、主の恵みとあわれみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私たちにあらわされたように、私たちも、キリストの優しいあわれみ深い愛を知らない世の人に、それを示さなければなりません。イエスは「あなたが私を世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは・・・あなたがわたしをつかわし・・・になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ17：18、23)と言われました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が・・・キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」(Ⅱコリント3：2、3)と言

ました。イエスは、神の子らの一人ひとりを手紙としてこの世に送られました。もしあなたがキリストに従う者であるなら、キリストはあなたを手紙として、あなたの住んでいる家族へ、村へ、町へ、お送りになるのです。イエスはあなたの心に内住して、まだイエスを知らない人の心に語りかけたいと望んでおられます。おそらくその人々は、聖書を読むこともなく、また聖書に書かれたことに耳を傾けたりもしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかもしれませぬ。けれども、もしイエスの真の代表者がいるなら、世の人々はその人を見て神の恵みを悟ることができ、イエスを愛し、イエスに仕えるように導かれるのです。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのですから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また性格は、人々が見て、キリストを正しく知り、またキリストに仕えることがどのようなことであるかを正しく理解させられるようなものでなければなりません。

もし私たちがキリストを代表する者であるなら、キリストに仕えることが実際にどれほど楽しいものであるかを人々に示すことでしょう。心が憂うつと悲しみで満た

され、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を与えます。そして、神は神の子らの幸福を喜ばれないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して間違ったあかしを立てているのです。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし、落胆するのを喜びます。また、私たちが神に信頼せず、神が快く私たちを救ってくださるお方であることを疑うのを喜びます。また、神は摂理のうちに私たちを害されたのだというように考えさせたり、神をあわれみと同情に欠けておられる方のように見せるのは悪魔の働きです。悪魔は、神に関する真理を曲解し、神に関する間違った思想を私たちの心に満たすのです。私たちは、しばしば、天の父に関する真理に堅く立つかわりに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せず、つぶやいて神を辱めるのです。悪魔は絶えず信仰生活を憂うつなものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持したことになります。

人生の道を歩く中で、自分の間違いや欠点や失望ばか

りを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどそのような状態で、たいへん失望し、励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜のことで、私はある庭園を歩いている夢を見て、その庭園の持ち主と思われる方に案内されていました。私は歩きながら花を摘み、その高いかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道をふさいでいるつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのです。この姉妹は案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの庭園も、このようないばらがあって本当に残念なことです」と言うのでした。すると、案内者は「いばらのことは気にしないでください。ただ害を受けるばかりですから。それより、バラやユリやナデシコを摘んではどうですか」と答えました。

あなたの経験のうちに、何か明るいことはなかったでしょうか。聖霊を感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみたとき、何か楽しい出来事はなかったでしょうか。神の約束は、道ばた一面に咲いている香り高い花のようなものではないでしょうか。私たちはその美しさと

甘い香りを、心から喜びましょう。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりです。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるなら、それは神の恵みを自分が軽視するばかりでなく、周囲の人々がいのちの道を歩くのを妨げることになるのではないのでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、そのことを語り、悲しんで、ついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心に射しこむ神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも影を投げかけます。

しかし、神が描いてくださった輝かしい光景を感謝しましょう。私たちは神の愛の確証を集めて、いつもそれをながめるようにしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力から人を救うために父のみ座を捨てられ、人性をもって神性をおおわれたこと、また私たちに代わって勝利を得てくださり、天を開き、栄光に輝く神のみ座を人にあらわされたこと、さらに、罪によって陥った滅びの淵から、墮落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れてくださったこと、そして人は、あがない主を信じて、神がゆるされた試練に耐えるならば、キリ

ストの義を着せられ、神のみ座にまで高められることなど、このような光景を私たちがめい想するように神は望んでおいでになるのです。

神の愛を疑うことや、神の約束を信頼しないことは、神を辱め、聖霊を悲しませるのです。たとえば、母親が子供の幸福と安全のためにあらゆる努力をしてきたにもかかわらず、子供たちがそのことを全然気にもとめず、不平ばかり言うなら、母親はどう感じることでしょう。

もし子供たちが母親の愛を疑ったとしたら、母親はどれほど悲しむことでしょう。どんな親でも、子供からどのように扱われるならば、どういう気持ちができるでしょう。それと同様に、天の父も、私たちに命を与えるために、ひとり子さえも賜ったその愛を私たちが信じないとしたら、私たちを尊重されるのでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物までも賜らないことがあるのか」（ローマ8：32）と言っています。けれども、口では言わなくても、その行いで「神は私にこう言っておられるのではない。おそらく神は、他の人々は愛されたかもしれないが、私を愛しておられるのではない」と語っている人がたくさんい

ます。

こうしたことはすべて、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからです。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませるのです。ですから、悪魔に試みられたときには、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでしょう。また、自分の感情を口に出したり、疑いの言葉を語るならば、それは自分に返ってくるばかりでなく、種のように他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結び、あなたの言葉の影響を取り消すことができなくなってしまう。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかもしれませんが、その言葉に感化された人々は、その不信から逃れることができないかもしれません。ですから、霊的な力といのちを与える事柄だけを話すというのは、ほんとうに大切なことです。

天使たちは、あなたが世の人々に、天の神についてどんなあかしをするのか耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前で執り成しをしておられるキリストについて語りましょう。友の手を握

るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスに引きつけることができます。

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っています。自分の悩みを友に語るのではなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひとことも言わないようにしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人をさらに明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、試みによって激しく打ちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うほどになっている勇敢な人々が多いのです。戦いがどれほど激しくても、失望せず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。このようにしてキリストの光があなたから輝き出るのです。「わたしたちのうちには、だれひとり自分のためだけに生きる者」(ローマ14:7)はいません。私たちが意識しないで及ぼす感化が、人々を励まし強めることも、また失望させたり、キリストと真理から追い払うこともできるのです。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは暖かさも明るさも持っておられ

ず、厳格、苛酷で、何の喜びも味わうことがなかったと
考えています。そして、すべての宗教経験がこのような
陰うつな色調を帯びていることが多いのです。

イエスは泣かれたが、笑顔を見せられたことは一度
もないということは、よく言われることです。私たちの
救い主は、本当に、人類のあらゆる悲しみを心を開いて
受け入れられたのですから、悲しみの人であって、悩み
を知っておられたに違いありません。イエスの生涯は自
己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれていた
が、その意気はくじけることはありませんでした。み顔
には、苦しみや不平の色はなく、いつも変わらない平和
な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ
心は命の泉であって、彼の行かれる所はどこにでも、休
息と平和、楽しみ、また喜びがもたらされたのです。

私たちの救い主は、実に真面目で熱心でしたが、決し
て憂うつでもなければ、気難しくもありませんでした。
救い主にならう人々もまた、熱心に目的を持って励むよ
うになり、個人的な責任を深く感じるようになります。
軽率な行為はなくなり、騒々しい楽しみや礼儀をわきま
えないような冗談はなくなります。しかし、イエスの宗
教は川のような平和を与えるのです。それは喜びの光を

消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔を曇らせたりするものではありません。キリストは仕えられるためではなく、仕えるために来られたのです。そして、キリストの愛が心を支配するなら、私たちは彼の模範に従うことができるようになるのです。

もし、私たちが、他人の不親切や不正な行為を心にとめて忘れないでいるならば、キリストが愛されたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くばかりの愛とあわれみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出ていくのです。私たちは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養い、自分に頼ることをやめ、他人の欠点に対して優しく忍耐強くならなければなりません。そうすれば、狭い利己心は根を断ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」（詩篇37：3）と言いました。「主に信頼して」いくのです。私たちは一日として重荷や心配、苦勞のない日はありませんから、すぐにそうした困難や試練を他人に話したくなります。

いろいろなとりこし苦勞をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、まるで、すべての祈りを聞き、必要なときにはいつでも助けて下さる、愛とあわれみとに満ちた救い主がおられないかのように人に思わせてしまいます。

また、ある人は絶えず恐れ、意味のないとりこし苦勞をしています。彼らは毎日神の愛のしるしに囲まれ、神の摂理のうちに恵まれていながら、祝福を見過ごしにしています。そのような人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかと、そういうことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで、感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会ったとき、唯一の助けの源である神のもとに行くかわりに、かえって不安と不満の心を起こして神から離れてしまいます。

このように不信仰であっていいのでしょうか。どうして感謝と信頼の心が無いのでしょうか。イエスは私たちの友です。全天は私たちの幸福を願っています。日常生活の困難、または、勞苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのです。心配して

はなりません。それはただ、私たちを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

仕事の上でいろいろな困難が起こり、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもあるでしょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神にまかせて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのです。良い結果をもたらすように、全力を尽くして自分の分を果たさなければなりません。イエスは助けを約束しておられるからといって、何も努力しなくてよいというわけではありません。私たちの助け主により頼んで最善を尽くしたならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が、心配して心を重くしているのは神のみ心ではありません。主は私たちを欺かれません。主は私たちに、「何も恐れることはない。前途には何の危険もない」とは言われません。試練や危険があることをよく知っておられて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはされず、確かな逃れの場所を示しておられるのです。イエスは、弟子たちのためにこのように祈られました。「わたしが願うのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを

悪しき者から守って下さることあります」「あなたがたは、この世では悩みがある。しかし、勇気を出なさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ 17 : 15、16 : 33)

キリストは山上の説教の中で、神を信頼することの大切さについて、尊い教訓を与えられました。これはすべての時代の神の子らを励ますためのもので、今日においても教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ、少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よ、と言われました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たされるのです。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」(マタイ 6 : 26)と救い主は問いかけられました。人にも生き物にも豊かに与えられる神は、すべての造られたものの必要を満たされるのです。空の鳥でさえ、神の見守りからもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落とすことはなさいませんが、必要は満たされます。小鳥は、神が散らされた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出ていきます。というのも、「あなたがたの天の

父は彼らを養っていて下さる」からです。「あなたがたは、彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」と言われています。理性を備え霊をもって神を礼拝する人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないのでしょうか。私たちが造られた神、命を支えられる神、また、私たちをご自分のかたちに似た者として造られた神は、ただ私たちが神に信頼してさえいれば、私たちの必要を満たして下さるのではないのでしょうか。

キリストは、野の花が天の父から与えられた美を競うように、あたり一面に咲いているのを指さして、これは、神の人に対する愛の表現であると弟子たちに言われ、また「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ6：28）と語られました。ソロモンの栄華でさえ、自然の花のこうした単純素朴な美しさにはとうてい及ばなかったのです。芸術的技巧をこらして生み出されたどんな華麗な衣装も、神の造られた花の自然な優美さや輝きとは比べものになりませんでした。イエスは、「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがどうか、ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ6：

30)と言われます。もし天の芸術家である神が、一日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細でいろいろな色彩を与えられたのだとするなら、神ご自身にかたどって造られた者には、どれほど心をとめておられることでしょうか。キリストの教えは、あれこれ思いわずらったり、疑ったり、悩んだりする信仰のない者への譴責です。

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおられます。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。私が与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな。またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ14:27、15:11)と言われました。

利己的な動機で、義務の道からはずれて求めた幸福は、不安定で変わりやすく、一時的なものです。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、不確かな道を歩いたり、悲しみや失望のまま置き去りにされることはありません。たとえ、この世に楽しみがなかったとしても、天国を待ち望んで喜ぶこと

ができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンにはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光を持ち、共におられるキリストからいつでも慰めを得ることができます。人生の歩みの一步一步が私たちをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、祝福された平和な家庭にまた一步近づけるのです。ですから、私たちの確信を投げ棄てないで、ますます信頼を深めなければなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上7：12)とありますが、神は終わりまで私たちを助けてくださるのです。主が私たちを慰め、破壊者の手から私たちを救われた記念の塔の数々をながめましょう。神は、涙をぬぐい、痛みを和らげ、心労を除き、恐怖を取り去り、必要を満たし、祝福を与えられました。このような、神のあわれみの一つひとつを常に心にとめて自分を奮い立たせ、私たちの残りの旅路を進まなければなりません。

私たちは、やがて来る闘争においては、新しい困難が起こることを避けることができませんが、将来を見るときも過去をふり返って、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くで

あろう」(申命記33:25)とすることができます。神は、私たちが耐えることのできないような試練にあわせられることはありません。どんなことが起こっても、試練を乗り越えさせる力が与えられることを信じて、与えられるままに私たちの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子供たちのために開かれ、栄光の王のみ口から「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ25:34)という祝福の言葉が、美しい音楽のように響いてきます。

こうして、あがなわれた者たちは、イエスが彼らのために用意された住居に迎え入れられるのです。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々です。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みなキリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりもはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのです。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、この世の外面的な美がとうてい及ぶものではありません。彼らは神

の大いなる白いみ座の前に罪のない者とされ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのです。

このような輝かしい天の報いを思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ16:26)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世が与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのです。罪からあがなわれ、清められ、神のご用のためにそのすべてをささげた魂は、この上もなく尊いものです。天では、神と天使たちは、ただ一人の救われた者のためにさえ大きな喜びを感じます。そしてその喜びは、清らかな勝利の歌となって広がっていくのです。

SOSTV ジャパン ミッション

SOSTV JAPAN MISSION

〒298-0214

千葉県夷隅郡大多喜町新丁17-2

☎/FAX 050-1141-2318

PCメール sostvjapan@outlook.com

www.SOSTV.jp

Save Our Souls

SOSTVは、読者の皆さんの後援で運営されている宣教ミニストリーです。皆さんの真心からお贈りくださる尊い献金は、より多くの方々に真理をお届けするために、大切に、また慎重に用いさせていただくことをお約束いたします。冊子をご覧になり、心に感銘を受けられた方は、次の口座に後援のほどをよろしく願いいたします。

【後援案内、振り込み先】

ゆうちょ銀行

記号 10570

番号 48323841

名称 SOSTV ジャパン ミッション

(他銀行からの振込み)

ゆうちょ銀行

店名 〇五八

店番 058

預金種目 普通預金

口座番号 4832384



何が問題なのか？

“なぜ” 10年、20年とキリストを信じているのに、相変わらず、霊的生活は無気力で弱いのでしょうか？
「イエス様を愛します」と告白し、長い間信仰生活を送ってきた多くのクリスチャンたちが、真実の福音を知らないために、今だに罪の鎖から解放されていないのです。

あなたは生まれ変わったのか診断してみよう！

“ク” クリスチャンは、キリストの光で天に向かう道を照らし、キリストがどのような方であるかを見せつける人々です。罪の鎖から解き放たれた人生、恵みのパワーの中で、完全な平和を味わう事ができる人生を送ります。このことは、ただ、上から下る新しい命が私の中に働くことによって可能となります。

“あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。”(ヨハネの福音書3:7) 生まれ変わった人に働く聖霊のパワーが、罪によって死んだ心に、命の息を与え、清められる生活へと導きます。イエス様は“新しく生れなければ(ヨハネの福音書3:3)”, すなわち、新しい心と、新しい目的と、新しい動機を受けて、新しい生涯に入らなければ”神の国を見ることはできない”(ヨハネの福音書3:3)と言われました。

ある人たちは、自分たちの中にある善を啓発すればいつか清められる、と信じています。しかし、それは人を死に連れ去る偽りです。“生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。”(コリント人への第一手紙2:14)